

日本中東学会ニューズレター

JAMES

NEWSLETTER

No. 125

2011

## 目次

会長挨拶	2
理事会・総会報告	4
第27回年次大会報告	14
【大会プログラム】	14
【公開イベント・シンポジウム】	18
【研究発表会場から】	19
【大会を終えて】	36
【大会決算】	39
『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告	39
第3回日本中東学会奨励賞の選考結果について	40
2010年度地域研究学会連絡協議会大会報告	41
電子版ニューズレターへの移行について	41
会員の異動	42
寄贈図書	43
事務局より	44
編集後記	45

## 会長挨拶

日本中東学会も 1985 年に発足して 26 年目を迎えます。壮年期に入ったといえます。しかしながら、日本中東学会を含めて日本の国内外を取り巻く状況は厳しいものばかりです。国内では 3 月 11 日に東日本大震災およびそれにとמוなう大津波による予想を超える甚大な人的・物的な被害がありました。いまだに数多くの人びとが行方不明のままです。さらに福島第一原子力発電所が地震・津波によって全電源を失うという壊滅的な打撃を受け、世界の原発事故史上最悪の放射線漏れの事故が起きてしまいました。この被害はどこまで広がるか予断を許さない非常に深刻な事態です。学会員にも被災された方々がいらっしやるかと思いますが、まず何よりも心よりお見舞いを申し上げる次第です。

3・11 という日付は 2001 年の 9・11 という日付とともにわれわれ中東研究者にとっても忘れることのできない日付となることでしょう。われわれはこの未曾有の危機的な事態に直面して、地震直後の計画停電に始まり、日本のエネルギー政策に関して抜本的な議論を行なわざるをえなくなっています。また原発に依存してきた電力消費の削減という観点から現在も節電が実施されており、われわれ自身の生活スタイルそのものを見直すことが迫られております。今後、原子力に代わるさまざまな代替エネルギーについて議論されることになるかと思いますが、天然ガスが改めて注目され、そのことによって資源供給地としての中東地域への関心が再び高まることになるのではないかとも思われます。中東といえば、石油はいうまでもなく、常にエネルギー問題との関係で日本と中東との関係が語られてきました。

しかし昨年末以来、「アラブ革命」の新たな時代をわれわれは同時代に生きる者として目撃しております。この革命は日本における中東認識を大きく転換することになるでしょう。チュニジアでの「ジャスミン革命」を皮切りに、エジプトでも 1・25 革命が起こり、長期独裁政権が倒れました。さらにリビア、イエメン、バハレーン、シリア、イラクといったほとんどすべてのアラブ諸国でも民衆が街頭デモに出て民主化を求めるといった状況が現在も続いております。もちろん、これからどうなるか予断を許すものではありません。

このような政治的な激動の状況下で日本中東学会の会長に就任したことに重い社会的な責任を感じざるを得ません。といいますのも、われわれ中東研究者がどのような「社会的貢献」をなしうるのかを考えざるをえないからです。もちろん、会員の皆様は個人としての立場から中東情勢に関してさまざまな媒体を通じてコメントや意見などを発信していることとは思いますが、今後、日本中東学会として何ができるかをやはりきちんと議論する必要があることは言うまでもないことです。

日本中東学会理事会はこれまで理事会内の職掌分担の徹底による分業体制を築いてきました。AJAMES 編集委員会はもとより、国際交流委員会も昨年度はバルセロナで開催された WOCMES（中東研究世界大会）と北京で開催された AFMA（アジア中東学会連盟）への会員の派遣を成功させました。両国際学会は今年度は開催されませんので、ちょっと一息というところです。また今年度の京都大学で開催された年次大会には KAMES（韓国中東学会）からキム会長とオー国際交流委員長が本大会にも参加してくださいました。CHAMES（中国中東学会）にも招待状をお送りいたしました。残念ながら会長をはじめとして所用で来日することができませんでした。しかし、今年次大会でもイラン研究に関する国際セッションが組まれました。今後ともアジア諸国の中東学会との交流はいっそう促進して、それぞれ国情が違って中東研究のあり方が異なるにしても、共同プロジェクトを発足させるなどより具体的な協力体制を築くことができればとも考えます。

さて、昨年から今年にかけて、学会にとって非常に悲しい出来事が続きました。歴代の学会会長経験者を二人も失うことになったからです。2010年7月3日には初代会長の梅棹忠夫先生が、そして2011年4月11日には、佐藤次高先生がご逝去されました。梅棹先生は学会発足から1991年まで、佐藤先生は1997年から2001年まで会長職にありました。本学会の胎動期から学会の歴史において先導的役割を果たされた二人の偉大な研究者を失ったことは日本中東学会としては誠に残念なことです。しかし、私たちはお二人の先生が日本中東学会に残された遺産を未来に向かって継承していく義務があるかと思えます。この場をお借りして、お二人の逝去に対して心から哀悼の意を表したいと思えます。

もう一つ会員の皆様をお願いします。長沢栄治・前会長が最新のニューズレターで指摘されていましたが、本学会は会員の皆様方の協力があって初めて成り立つボランティアな組織です。この学会が維持・発展していくには皆様方からの会費が必要です。ぜひとも会費を払っていただくと同時に学会への活動への積極的な参加と協力をお願いする次第です。

年次大会は会員が一年に一度、研究報告を行なうとともに、お互い顔を合わせて議論や意見交換のできる貴重な場であり、学会にとって最も重要な行事です。2011年度年次大会を主催してくださいました京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の小杉泰・大会実行委員長、東長靖・事務局長、人間環境学研究科の岡真理さん、そして事務局の長岡慎介さん、さらにお名前は一人ひとりあげることではできませんが、大会実行委員会の皆様に心から感謝申し上げます。

最後に、今期の学会事務局は慶應義塾大学商学部に置き、新井和広会員が事務局長に就任しましたことをご報告申し上げます。この二年間、微力ではございますが、会員の皆様のご協力の下に最善の努力を尽く所存でございますので、どうぞよろしくご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

（臼杵陽）

## 理事会・総会報告

### 【2011年度第1回理事会】

日時：2011年4月18日（月）18:00～20:00

場所：日本女子大目白キャンパス百年館高層棟7階マシン室

出席：臼杵陽、小松久男、長沢栄治、大稔哲也、黒木英充、飯塚正人、三浦徹、  
林佳世子、山岸智子、新井和広

欠席：酒井啓子、桜井啓子、小杉泰、東長靖

#### [議題]

##### 1. 特任理事の選任

新井和広会員を事務局長として、青山弘之会員を日本中東学会年報（AJAMES）編集委員長として特任理事に選出した。

##### 2. 理事の任務分掌

事務局の業務負担の軽減、AJAMESの編集体制などを中心に理事の任務分掌を審議した結果、以下の通りとなった。

#### [理事の任務分掌]

会長：臼杵陽

事務局長：新井和広

総務：小松久男、長沢栄治

国際交流：酒井啓子、東長靖、長沢栄治

AJAMES編集：青山弘之（編集委員長）、飯塚正人、桜井啓子、林佳世子

財務・会則：小杉泰、三浦徹

企画：黒木英充、小松久男

渉外：大稔哲也

ニューズレター編集：山岸智子

ホームページ：林佳世子

##### 3. その他

- ・ AJAMES編集体制、編集委員候補等について審議した。
- ・ 公開講演会開催のための科学研究費補助金が採択されなかったことを受けて、本年度の公開講演会の企画案を再検討した。
- ・ 学会ウェブサイト（ホームページ）の移転先について、サーバの候補、独自ドメイン取得の可否等を中心に審議した。
- ・ 中東研究文献データベースについて、東洋文庫連携事業分担金が減額されることが報告された。

- ・ 佐藤次高元会長の葬儀に際して日本中東学会理事会有志が「日本中東学会理事会」の名前で供花を行うことにした。

### 【2011年度第2回理事会】

日時：2011年5月21日（土）10:00～12:30

場所：京都大学吉田キャンパス本部構内総合研究2号館4階会議室

出席：臼杵陽、小杉泰、東長靖、小松久男、長沢栄治、大稔哲也、黒木英充、飯塚正人、三浦徹、林佳世子、山岸智子、青山弘之、新井和広

欠席：酒井啓子、桜井啓子

〔議題〕（議題の詳細については次ページ以降の総会報告もご参照ください）

1. 2010年度事業報告・2010年度決算報告を承認した（詳細は総会報告）。
2. 2011年度事業計画・2011年度予算案を承認した（詳細は総会報告）。
3. 『日本中東学会年報（AJAMES）』第26号編集報告を受け、第27号編集計画を承認した（詳細は総会報告およびAJAMES編集報告）。
4. 日本中東学会ニューズレターの形態について、現在の紙媒体から電子媒体への移行を検討し、可能であれば2011年度から順次移行を進めていくことを承認した。
5. 日本中東学会ウェブサイト（ホームページ）移行先について、有料のレンタルサーバを借りてウェブサイトを移行することを承認した。
6. 2011年度公開講演会開催について承認した（詳細は総会報告）。
7. 会員動向について報告があった（詳細は総会報告）。
8. 総会資料を確認した。
9. 2012年度大会について、東洋大学での開催を承認した。
10. 新事務局の運営について審議した。
11. 会費納入率について報告があった。
12. 会員名簿の発行時期および存続について審議した。

### 【日本中東学会第27回年次総会報告】

日時：2011年5月21日（土）17:30～18:30

会場：京都大学吉田南キャンパス人間・環境学研究科棟地下講義室

出席：当日出席者89名、委任状提出128名、計217名

（会員数693名、定足数5分の1の139名により、総会成立）

#### 1. 司会および総会役員の選出

堀井優会員の司会により、議長として奈良本英佑会員、書記として菅瀬晶子、田浪亜央江両会員、議事録署名人として長谷部史彦、鷹木恵子両会員を選出した。

## 2. 2010 年度事業報告および決算

店田廣文前事務局長および各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

### (1) 事業報告（報告：店田廣文前事務局長）

- ・ 第 26 回年次大会を、2010 年 5 月 8～9 日に中央大学多摩キャンパスにおいて開催した。
  - ・ 公開講演・公開シンポジウム「ナポレオン『エジプト誌』と近代文明」
  - ・ 研究発表 8 部会 64 本、企画セッション 2 本、特別講演 2 本。
  - ・ 韓国中東学会から Chang Byung-cok 元会長と Choi Jin-young 事務局長を招待した。
- ・ 第 26 回年次大会にあわせ開催した総会での承認により、学会細則 II. 2 を改正した。その規定するところにより、新たに会員会費特例規程を制定した。これは定職を持たない若手研究者を応援することを念頭においた制度である。本人による申請を経て承認されるので、該当する会員は連絡を。（規定の詳細はニューズレター第 123 号をご参照ください。）
- ・ 日本中東学会年報（AJAMES）第 26-1 号、第 26-2 号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。
  - ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「学術定期刊行物」の助成を受けた。
  - ・ 海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
  - ・ 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ（CiNii）上で公開されるよう手配した。
- ・ 第 16 回公開講演会「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム—中東に誕生したアブラハムの宗教」を、2010 年 7 月 17 日に、東北大学・学術交流会館において開催した。
  - ・ 開催にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公開発表（B）」の助成を受けた。
- ・ 第 3 回日本中東学会奨励賞受賞者を選考した。
- ・ ニューズレター和文 3 回（総頁 110 頁）を発行した。第 121 号（7/1、年次大会特集、50 頁）、第 122 号（11/12、40 頁）、第 123 号（2011/2/5、20 頁）。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2010」（日本語版、英語版）につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ホームページにおいて公開した。
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報を行った。
- ・ 地域研究会連絡協議会の幹事組織として、地域研究の興隆を図るとともに大稔哲也理事が担当して相互交流に努めた。
- ・ 韓国中東学会第 19 回国際会議に招待を受け、長沢栄治会長、青山弘之会員が参加し発表を行った。

- ・ 第3回中東学会世界大会に、国際交流基金知的交流会議助成プログラムの援助を受け、NIHU プログラム・イスラーム地域研究および「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業：アジアのなかの中東」と連携して、「2つの海の出会うところー多元的な中東理解を求めて」を総合タイトルに、4 パネル・21 名を派遣した。
  - ・ アジア中東学会連合 (AFMA) の第8回大会が9月25～26日に北京で開催された。中国中東学会と中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所の共催で、今大会の共通テーマは「中東の安全保障と東アジアの役割」であった。日本中東学会からは、会長、理事4名と会員6名が参加した。
  - ・ 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行った。
  - ・ 第14期役員選挙を実施した。
  - ・ 電子メールを利用した会員調査を実施した (2011-2012 年度名簿用会員データ収集のため)。
  - ・ 大学評価・学位授与機構に、機関別認証評価委員会専門委員候補者として、6名を推薦した。
  - ・ 日本学術会議に、会員及び連携会員の候補者に関して、4名の会員に関する情報を提供した。
  - ・ 会員の増減：2010 年度中には入会者31名、退会者34名 (うち逝去による退会6名、会費滞納による退会20名) の異動があった。その結果、2011年3月31日現在の会員数 (年度末退会者28名を含む) は718名 (正会員539名 / うち海外在住15名；学生会員179名 / うち海外在住8名) となった。
- (2) 『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集報告 (報告：青山弘之編集委員長)
- ・ AJEMES 第26-1号、第26-2号が無事刊行・発送された。
  - ・ 26-1号は2010年7月に刊行・発送され、内容は、論文4 (うち英語1)、研究ノート1、特集1 (総論1+論文3、英語・仏語)、書評3 (うち英語1)、博士論文要旨2などであった。
  - ・ 26-2号は、2011年1月に刊行・発送され、内容は、論文4 (うち英語2)、研究ノート2 (うち英語2)、書評3 (うち英語2)、博士論文要旨5、JAMES Activities 2011 などであった。
  - ・ 欧文率は62.9%で、特集を所収することで科研費の条件を満たすことができた。
- (3) 2010年度決算報告 (報告：店田廣文前事務局長)
- ・ 全体として、会費の納入率が低いという問題がある。今後どのようにして納入率を上げるのが課題である。会費収入で端数が出たのは、逝去等で会費を返納した際の手数料等である。
  - ・ AJAMES 編集費が予算よりも低い支出になったのは、業者が作業を負担してくれるようになったためである。

- ・ ニュースレター発行費も当初予算より低い額に抑えることができた。
- ・ 国際交流費が予算よりも大幅に低い額になったのは、助成金を使うことができたためである。
- ・ アルバイト謝金が当初予算から大幅に増加しているが、これは店田前事務局長が任期中に健康を害し、アルバイトの業務負担が増えたためである。また、これまで低く抑えられていたアルバイトの単価を上げたことも支出増加につながった。

(4) 監査報告（報告：泉淳監事）

- ・ 早稲田大学にて、泉沢久美子監事と 2010 年度の会計監査を行った結果、適正に執行されたことを確認した。しかし、将来的にはより一層合理的に執行されることが望ましい。

<質疑応答> 特になし

<採決> 以上の 2010 年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。

3. 第 14 期役員選挙報告および理事の任務分掌、特任理事・監事の選出

飯塚正人選挙管理委員会委員長および新井和広事務局長より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 第 14 期役員選挙報告（報告：飯塚正人選挙管理委員会委員長）

- ・ 評議員選挙は、2011 年 1 月 14 日に開票した結果、有権者数 424 名のうち、投票者数 131 名（うち有効票 129、無効票 1、白票 1）、投票率は 30.9%であった。評議員数は 60 名以内と定められており、得票数 60 位の被選挙権者を加えると 60 名を超えるため、今回の評議員は 59 名となった。
- ・ 選出された評議員 59 名の名前はニュースレター124 号にて発表した。
- ・ 続いて新評議員による理事選挙が行われ、2011 年 1 月 28 日に開票した結果、13 名の理事が選出された。その際、連続 3 期理事を務めた赤堀雅幸、加藤博、栗田禎子評議員は被選挙権を保有しないため、予め理事候補より除外された。投票者数は 49 名（うち有効票 45、無効票 4、白票 0）、投票率は 83.1%であった。
- ・ 選出された理事 13 名の名前はニュースレター124 号にて発表した。

(2) 理事の任務分掌および特任理事の選出報告（報告：新井和広事務局長）

- ・ 新井和広会員を事務局長、青山弘之会員を編集委員会委員長として特任理事に選出した。
- ・ 2011 年度第 1 回理事会で承認された、理事の任務分掌および特任理事の選出について報告があった。（理事の任務分掌の詳細については、上記 2011 年度第 1 回理事会報告をご参照ください。）

(3) 監事の推薦（報告：新井和広事務局長）

- ・ 第 14 期理事会は岩崎えり奈会員、高橋圭会員を監事に推薦する。

<採決> 以上の第14期役員選挙報告および理事の任務分掌、特任理事・監事の選出について、総会はこれを承認した。

#### 4. 2011年度事業計画および予算

新井和広事務局長および各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

##### (1) 第14期事務局紹介（報告：新井和広事務局長）

- ・ 2011年度および2012年度は、日本中東学会事務局が慶應義塾大学商学部・新井和広研究室に設置される。またアルバイトとして、飯野りさ・安川悦子・北爪秀紀氏が業務に従事する。

##### (2) 事業計画（報告：新井和広事務局長）

- ・ 第27回年次大会を2011年5月21～22日に、京都大学において開催する。
- ・ 日本中東学会年報（AJAMES）第27-1号（2011年7月）、第27-2号（2012年1月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。
- ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「学術定期刊行物」の助成を受ける。
- ・ 第17回公開講演会「戦前・戦中期日本と中東イスラーム世界—イスラームと大川周明に注目して」を、2011年11月12日に、山形県酒田市において開催する。
- ・ ニュースレターを年数回発行する。また、ニュースレターの形態について、現在の紙媒体から電子媒体への移行を検討し、可能であれば部分的にでも電子媒体に移行する。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース1989-2011」（日本語版、英語版）につき、東洋文庫と連携し、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ホームページにおいて公開する。
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報を行う。学会ホームページについては本年度中に国立情報学研究所内のスペースから外部のサーバへ移行すると同時に若干のリニューアルも行う。
- ・ 海外の関連学会との交流を促進する。
- ・ 第27回年次大会に、韓国中東学会から Daesung, KIM 会長・Chongjin OH 国際交流委員長を招待する。当初の予定では Younghoon, SON 事務局長を招待する予定であったが諸般の理由で来日できなかった。
- ・ 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- ・ 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
- ・ 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行う。
- ・ 学会事務局を、早稲田大学から慶應義塾大学に移転する。

- ・ 2011-2012 年度会員名簿を刊行する。
- (3) 『日本中東学会年報 (AJAMES)』第 27-1 号、第 27-2 号編集計画、2011 年度編集体制 (報告: 青山弘之編集委員長)
  - ・ AJAMES 第 27-1 号は 2011 年 7 月に刊行・発送の予定。特集、再投稿を含む投稿原稿は 25 本 (うち非日本語 10 本)。採用原稿は 17 本 (うち非日本語 6 本) で、論文 4、研究ノート 2、書評 8 (うち英語 3)、博士論文要旨 1、特集 2 (総論+3 論文、英語・仏語)。
  - ・ AJAMES 第 27-2 号に関しては、2011 年 6 月 1 日締め切り、2012 年 1 月に刊行・発送の予定。
  - ・ 編集体制としては、青山弘之会員が編集委員長、飯塚正人、桜井啓子会員が副編集長となった。また加藤博、村上薫、山口昭彦、山中由里子会員が編集委員を退任、横田貴之、山尾大、阿部るり会員が着任、その他の編集委員は留任した。
- (4) 2011 年度予算案 (報告: 新井和広事務局長)
  - ・ 東洋文庫連携事業分担金が昨年度の 80 万円から 60 万円に減額された。
  - ・ 事務局費のアルバイト謝金が 2010 年度並の予算額になっているが、これは新事務局で業務を行う専任教員が一人しかいないため、昨年と同様アルバイトに業務を依頼する必要があるためである。
  - ・ 事務局備品費という項目を新たに追加し、35 万円を計上しているが、これは新事務局が個人研究室であるため、学会事務を行うための機材を購入するためである。
  - ・ 公開講演会開催費は、科学研究費補助金が採択されなかったため、必要最小限度の 35 万円を計上した。
  - ・ インターネット広報費は、学会ウェブサイト (ホームページ) の移転先としてレンタルサーバを借りるため、昨年の予算額に 5 万円を加えた額を計上した。

<質疑応答> 特になし

<採決> 以上の 2011 年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

#### 5. 第 3 回日本中東学会奨励賞について (報告: 三浦徹選考委員長)

- ・ 本賞は若手研究者の国際発信力を高めることが趣旨であるが、今回の選考にあたって評議員から候補作の推薦を募ったところ、推薦数が非常に少なかった。そして、大変残念ではあるが、今回は受賞作なしという結果になった。
- ・ 若手 (40 歳以下) 研究者の発奮を期待したい。

<質疑応答>

- ・ 秋葉淳会員から、評議員による推薦のスケジュールに関する質問があり、三浦徹選考委員長が今回の奨励賞のスケジュールを説明した。

## 6. その他

- ・ 三浦財務・会則担当理事から、学会の財務状況についての説明があった。
- ・ 2011 年度予算案では前年度からの繰越金が 900 万円以上あり、余裕があるように見えるが、これは会費の前納制によってそのように見えるだけである。
- ・ 財務状況は、1990 年代は AJAMES の印刷費が払えないほど切迫していた。その後有志から 200 万円の寄付をいただいたり、科学研究費補助金に採択されたりするようになって落ち着いてきたというのが経緯である。
- ・ 会費納入率も、予算では前年度の納入率に対してプラス 5%を見込んでいる。つまり納入率 100%を見込んでいるわけではない。このため実際には納入率が下がっているのに、それが見えにくくなっている。
- ・ 本日の理事会でも検討したが、今後財政の一層の健全化をはかっていきたい。
- ・ 慣例により、新たに選出された監事が会員に挨拶（立ち上がって会釈）した。新監事 2 名のうち、会員総会に出席していた高橋圭会員がその任にあたった。

## 7. 会長挨拶（臼杵陽会長）

- ・ これまでカリスマ的会長がいたため学会運営がうまくいっていたが、学会事務局の負担が増えている。そのため理事にも業務を割り振って運営している。
  - ・ アラブ民衆革命、東日本大震災の影響で天然ガスへの依存が強くなることなどから、中東への注目も高まってくるのが予想される。しかしながら、エネルギー関連のみで中東が注目されるのはいびつな状況である。今後会員による情報発信の重要性がますます増してゆくであろう。
  - ・ 国際交流について、本年度は国際交流基金から助成金を得ることができたが、いつもそのようにいくとは限らない。その点会員の皆様には理解を求めたい。今年度は大きな国際学会の予定はないが、個人的なレベルでも国際交流に尽力していただきたい。
  - ・ 初代会長梅棹忠夫先生、佐藤次高先生が亡くなるなど、大変悲しい出来事が続いた。偉大な先達の遺したものを継承してゆくのは我々の義務である。
  - ・ 学会は会員のボランティアによって成り立っている。会費の納入と学会の活動への積極的参加をお願いしたい。
  - ・ 本大会の会場校となっていたいただいた京都大学の小杉会員、東長会員ほか、第 27 回年次大会実行委員会に心よりお礼を申し上げる。
  - ・ 今後 2 年間どうかよろしくをお願いしたい。
- (なお会長挨拶の全文は、本ニューズレター巻頭に掲載されています。)

## 8. 議事終了

- ・ 議事終了につき議長が降壇し、司会者により総会の閉会が宣言された。

(新井和広)

2010 年度決算

本会計

収 入	10 年度予算	10 年度決算
<b>2009 年度よりの繰越金</b>	<b>9,901,664</b>	<b>9,901,664</b>
<b>年会費</b>	<b>5,698,000</b>	<b>4,933,105</b>
正・学生会員	5,698,000	4,933,105
2007 年度以前分	68,000	32,000
2008 年度分	201,000	100,000
2009 年度分	339,000	250,000
2010 年度分	1,121,000	1,075,000
2011 年度分	3,969,000	3,311,105
2012 年度以降分	0	165,000
賛助会員	0	0
<b>その他</b>	<b>4,973,000</b>	<b>4,927,952</b>
科研費出版助成金	900,000	900,071
科研費公開講演会助成金	900,000	880,017
利子	4,000	837
AJAMES 販売代金	250,000	208,780
海外郵送費実費	10,000	0
AJAMES 広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	800,000	800,000
NII-ELS 著作権料	200,000	179,043
早稲田大学学会補助金	0	50,000
国際交流基金助成金	1,909,000	1,909,000
雑費	0	204
<b>収入合計</b>	<b>20,572,664</b>	<b>19,762,721</b>

(単位:円)

<b>2011 年度への繰越金</b>	<b>9,620,727</b>
郵便振替口座	8,448,752
三井住友銀行口座	1,045,074
Paypal 口座	19,265
現金	107,636

支 出	10 年度予算	10 年度決算
<b>事務局費</b>	<b>1,550,000</b>	<b>2,168,696</b>
アルバイト謝金	1,100,000	1,676,625
通信費	70,000	74,450
消耗品費	200,000	207,669
会議費	35,000	56,852
交通費	20,000	41,800
振込手数料	20,000	16,800
事務局移転費	0	0
資料保管費	105,000	94,500
<b>事業費</b>	<b>8,359,825</b>	<b>7,973,298</b>
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	0
AJAMES 編集費	330,000	20,920
同欧文校閲費	300,000	478,635
同印刷製本費	1,970,825	2,352,577
編集委員会交通費	200,000	40,200
ニューズレター発行費	500,000	322,350
AJAMES/NL 発送費	450,000	502,255
AJAMES 海外発送費	135,000	146,440
選挙費用	150,000	114,120
国際交流費	180,000	3,260
インターネット広報費	20,000	16,380
公開講演会開催費	900,000	880,017
学会奨励賞運営費	10,000	0
中東文献 DB 更新費	850,000	850,000
地域研究会協議会分担金	5,000	0
中東研究世界大会派遣費等	1,909,000	1,909,000
特別基金繰り入れ	0	0
諸雑費	50,000	37,144
<b>支出合計</b>	<b>9,909,825</b>	<b>10,141,994</b>
<b>2011 年度への繰越金</b>	<b>10,662,839</b>	<b>9,620,727</b>
<b>総計</b>	<b>20,572,664</b>	<b>19,762,721</b>

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2009 年度よりの繰越金	<b>518,659</b>	
第 26 回年次大会余剰金	<b>104,303</b>	
利子	<b>142</b>	
2011 年度への繰越金		<b>623,104</b>
<b>合計</b>	<b>623,104</b>	<b>623,104</b>

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2009 年度よりの繰越金	<b>1,503,355</b>	
奨励金		<b>0</b>
利子	<b>386</b>	
2011 年度への繰越金		<b>1,503,741</b>
<b>合計</b>	<b>1,503,741</b>	<b>1,503,741</b>

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2009 年度よりの繰越金	<b>45,637</b>	
利用料(2名)	<b>7,000</b>	
保育料		<b>28,200</b>
保育サポーター交通費		<b>1,400</b>
振込手数料		<b>735</b>
利子	<b>8</b>	
2011 年度への繰越金		<b>22,310</b>
<b>合計</b>	<b>52,645</b>	<b>52,645</b>

(単位:円)

2011年度予算

本会計

収入	10年度予算	11年度予算
2009年度よりの繰越金	9,901,664	—
2010年度よりの繰越金	—	9,620,727
<b>年会費</b>	<b>5,698,000</b>	<b>5,643,000</b>
正・学生会員	5,698,000	5,643,000
2008年度以前分	269,000	46,000
2009年度分	339,000	180,000
2010年度分	1,121,000	321,000
2011年度分	3,969,000	1,317,000
2012年度分	—	3,779,000
賛助会員	0	0
<b>その他</b>	<b>4,973,000</b>	<b>2,796,740</b>
科研費出版助成金	900,000	900,000
科研費公開講演会助成金	900,000	0
利子	4,000	500
AJAMES販売代金	250,000	250,000
海外郵送料実費	10,000	0
AJAMES広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	800,000	600,000
国際交流基金助成金	1,909,000	846,240
NII-ELS著作権料	200,000	200,000
<b>収入合計</b>	<b>20,572,664</b>	<b>18,060,467</b>

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額および納付率

年度	未納額	納付率
2007年度分		9%
2008年度分	330,000	22%
2009年度分	665,000	25%
2010年度分	1,070,000	50%
2011年度分	2,395,000	57%
2012年度分	6,095,000	
<b>合計</b>	<b>10,555,000</b>	

\*各年度の年会費収入予算は、その年の会費未納額に、その前年度分会費の前年度における納付率に5%を足して算出している例)2011年度分会費予想収入

=2011年度会費未納額×(2010年度会費納付率+5)÷100

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2010年度よりの繰越金	623,104	
利子	100	
2012年度への繰越金		623,204
<b>合計</b>	<b>623,204</b>	<b>623,204</b>

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2010年度よりの繰越金	22,310	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	10	
2012年度への繰越金		72,320
<b>合計</b>	<b>72,320</b>	<b>72,320</b>

(単位:円)

支出	10年度予算	11年度予算
<b>事務局費</b>	<b>1,550,000</b>	<b>2,620,000</b>
アルバイト謝金	1,100,000	1,700,000
通信費	70,000	70,000
消耗品費	200,000	200,000
会議費	35,000	35,000
交通費	20,000	100,000
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	0	350,000
事務局移転費	0	50,000
資料保管費	105,000	95,000
<b>事業費</b>	<b>8,359,825</b>	<b>6,266,240</b>
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	200,000
AJAMES編集費	330,000	50,000
同欧文校閲費	300,000	300,000
同印刷製本費	1,970,825	2,000,000
編集委員会交通費	200,000	200,000
ニューズレター等発行費	500,000	500,000
AJAMES/NL発送費	450,000	450,000
AJAMES海外発送費	135,000	145,000
選挙費用	150,000	0
国際交流費	180,000	100,000
インターネット広報費	20,000	70,000
公開講演会開催費	900,000	350,000
学会奨励賞運営費	10,000	0
中東文献DB更新費	850,000	650,000
地域研究学会協議会分担金	5,000	5,000
国際交流基金助成金	1,909,000	846,240
特別基金繰り入れ	0	50,000
諸雑費	50,000	50,000
<b>支出合計</b>	<b>9,909,825</b>	<b>8,886,240</b>
<b>2011年度への繰越金</b>	<b>10,662,839</b>	
<b>2012年度会費分留保</b>		<b>3,779,000</b>
<b>2012年度への繰越金</b>		<b>5,395,227</b>
<b>総計</b>	<b>20,572,664</b>	<b>18,060,467</b>

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2010年度よりの繰越金	1,503,741	
奨励金		0
利子	300	
2012年度への繰越金		1,504,041
<b>合計</b>	<b>1,504,041</b>	<b>1,504,041</b>

(単位:円)

## 第 27 回年次大会報告

### 【大会プログラム】

5月21日(土) 公開イベント (京都大学吉田南キャンパス人間・環境学研究科棟  
地下講義室)

第1部: 朗読劇「The Message from Gaza〜ガザ、希望のメッセージ〜」

脚本・演出: 岡 真理、出演: 学生・市民有志

第2部: シンポジウム「抵抗の文学〜世界文学の中のパレスチナ〜」

司会: 山本 薫 (東京外国語大学)

パネリスト: 鶴飼 哲 (一橋大学、フランス文学)、太田昌国 (編集者、民族問題)、岡 真理 (京都大学、現代アラブ文学)、細見和之 (大阪府立大学、詩人・ドイツ思想)

日本中東学会総会

懇親会 (吉田本部キャンパス)

5月22日(日) 研究発表 (京都大学吉田南キャンパス総合人間学部棟)

### 個人発表

#### 第1部会

森山央朗 (国際問題研究所) 「ホラーサーン系「ハディースの徒」—その活動と影響」

松本隆志 (中央大学) 「ウマイヤ朝史叙述に内在するストーリーの分析—ホラーサーン総督ヤズィード・ブン・アルムハッラブ解任の叙述について」

中野さやか (東京大学) 「『歌所』に記されたアッバース朝宮廷音楽家師弟関係の系譜の分析」

小野仁美 (学習院女子大学) 「イスラーム法におけるイフティラーフ (法の見解の相違)」

角田紘美 (早稲田大学) 「『コルドバ歳時記』に見られる安打留守のキリスト教祝祭日」

辻明日香 (東京大学) 「14世紀下エジプトに生きたコプト聖人—ユハンナー・アッルッバーンの生涯」

茂木明石 (上智大学) 「聖者伝史料に収録された『シャーフィイー言行録』から見たイマーム・シャーフィイーの「聖者」イメージの変容」

#### 第2部会

飛奈裕美 (日本学術振興会特別研究員) 「エルサレム市におけるパレスチナ人の選挙参加—選挙参加の是非をめぐる議論を中心に」

- 佐藤寛和 (岡山大学)「パレスチナ難民問題とダレット計画の不可分性に関する論争—伝統的史観に挑戦する「新しい歴史家」の諸相」
- 田浪亜中央 (成蹊大学)「〈不在者〉であることはいかに学ばれるか—イスラエルの小学校アラビア語教科書と、帰属の意識化に対する妨害」
- 役重善洋 (京都大学)「矢内原忠雄の民族・国家観とシオニズム」
- 佐々木紳 (東京大学)「近代オスマン人の帝国意識—帝国的知識人としての新オスマン人」
- 山下真吾 (東京大学)「オスマン朝の歴史書に見られるオスマン朝の優越性の議論」
- 新井春美 (拓殖大学)「トルコの対外政策におけるアイデンティティの展開」

### 第3部会

- 三代川寛子 (上智大学)「コプト正教会の政治的役割—サーダート政権期とムバーラク政権期の比較」
- 福永浩一 (上智大学)「ハサン・バンナーの著作に見られる歴史観—ムスリム同胞団における思想の変容に関する考察」
- 吉川卓郎 (立命館アジア太平洋大学)“Jordan in International Relations: Security, Economy, and State Interests”
- 佐藤紀子 (釜慶大学)「イラク難民と移住先受け入れ集団との関係—シリア正教会教徒の事例」
- 白谷望 (上智大学)「現代モロッコにおける政治アクターの分断統治—イスラーム主義政党「公正開発党」合法化以降の展開」

### 第4部会

- 竹村和朗 (東京大学)「エジプト口語アラビア語の諺—我々はどのようにしてそれを理解できるか」
- 鷺見朗子 (京都ノートルダム女子大学)・鷺見克典 (名古屋工業大学)「アラビア語習得とアラブ文化への興味—アラビア語専攻学生と非アラビア語専攻学生の比較検討」
- 竹田敏之 (京都大学)「現代アラビア語の展開とハット (アラビア書道) の隆盛—文字改革と活字書体の開発を中心に」
- 鈴木珠里 (大東文化大学)「フォルグ・ファッロフザードの詩的空間・詩的イメージの分析—ヨーロッパ旅行記「異国にて」“Dar Diyari Digar” を手掛かりに」
- 田熊友加里 (日本女子大学)「19世紀末ベルリンにおける絨毯収集家とオリエント観の形成—ジェームズ・サイモン(1851~1932年)とその一族を事例として」
- 後藤絵美 (日本学術振興会特別研究員)「現代エジプトにおける芸能人女性の「悔悛」と夢—ヴェール着用を支えた出来事と思想について」
- 千葉悠志 (京都大学)「アラブ諸国における情報独立の動き—通信社・通信組織に着目して」

## 第5部会

渡邊祥子（日本学術振興会特別研究員）「モスクから議会へ、議会からモスクへ—第二次大戦後のアルジェリアにおける政教分離法適用問題とウラマー協会の政治化」

関佳奈子（上智大学）「スペイン領モロッコにおける「独立戦争」再考—指導者アブドゥルカリームの言説を手がかりに」

Kangsuk KIM（Hankuk University of Foreign Studies）“Limited Impact of Cold War in the Middle East and the Failure of Eisenhower’s Containment Policy: U.S. Misperception of Nasserism under Israel Lobby and the Failure of the Baghdad Pact”

星光孝（独立行政法人国際協力機構）“Labor-export in the Arab Republic of Egypt: The Effect of Emigration Policy, Labor Policy and their Interrelatedness on Labor-export”

梶堀木綿子（京都大学）「アミール・アブドゥルカーディル・ジャザーイリーの生涯と思想におけるジハード観」

私市正年（上智大学）「1940年代末のZawiya al-Hamilの青年たちとアルジェリア・ナショナリズムの思想・運動—新史料「al-Ruh」紙の予備的考察」

石田友梨（京都大学）「初期スーフィズムにおける靈魂論と修行論の関係性—フジュウィーリー『隠されたものの開示』における魂（nafs）の概念より」

## 第6部会

堀抜功二（日本エネルギー経済研究所）「アラブ首長国連邦におけるアブダビ・ドバイ優位体制と首長国間関係—連邦体制の再検討から」

近藤重人（慶應義塾大学）「第一次石油危機時のアラブ諸国間外交—アラブの石油戦略形成に果たしたクウェートの役割—1973年～1974年」

上山一（国際協力機構）「GCC諸国におけるイスラム銀行業の費用効率性」

川村藍（京都大学）「イスラーム金融をめぐる法の二元性と民事紛争」

萩原淳（京都大学）「石油大国の逼迫するエネルギー事情—サウディアラビアを例として」

黒宮貴義（一橋大学／外務省）「中東産油国を含む資源輸出国に対するオランダ病モデルの適用と政府の政策に関する実証研究—サウジアラビアを例に」

泉淳（東京国際大学）「米国ムスリムの政治関与—大統領選挙を中心として」

## 第7部会

小島宏（早稲田大学）「シンガポールにおける家族形成行動のムスリム・非ムスリム間の差異」

野中葉（慶應義塾大学）「インドネシアの大学ダアワ運動におけるタルビヤの展開」

- 井上貴智（京都大学）「現代イスラーム世界における「科学のイスラーム化」 — マレーシアにおけるタウヒード科学教育の事例から」
- 松山洋平（東京外国語大学）「イスマーイール・アル＝ファールキーの「知識のイスラーム化」論の射程とその展開」
- 平野淳一（京都大学）「イスラーム連帯の新局面 — 「イスラーム諸学派近接世界アカデミー」と『接近の使信』の事例から」
- 生田篤（九州大学）「「政治的アイデンティティ」論から見た『福岡モスク』街道の過程について」

## 第8部会

- 子島進（東洋大学）「信仰に根ざした NGO 活動 — イスラーム圏の事例から」
- 藤本透子（国立民族学博物館）「ポスト社会主義におけるイスラームの新たな展開 — カザフの死者儀礼をめぐって」
- 村上薫（アジア経済研究所）「トルコ型近代家族と性的名誉（ナームス）概念の変容」
- タシ・メメティ（中部大学）「ホスト社会再考 — トルコにおける政府とウイグル人移住民の関係から」
- 増野伊登（慶應義塾大学）「英国占領下イラクの反英抵抗ネットワークと政治運動 — 1920年反乱の前後に焦点を当てて」
- 黒田賢治（京都大学）「現代イランにおけるハウゼ教育と法学権威の再生産メカニズム — 修了課程の講義を手がかりに」

## 企画セッション

### (1) 日本中東学会・韓国中東学会合同企画セッション

司会：臼杵陽

報告1：Dae Sun KIM（韓国中東学会会長・韓国外国語大学）“Education Policy in Atatürk’s Period for Modernization of Turkey”

報告2：Chong Jin OH（韓国中東学会国際交流委員長・韓国外国語大学）“Diaspora Nationalism: Comparative analysis of the Ahiska (Meskhetian) Turks and Koreans in post-Soviet Kazakhstan and Uzbekistan”

### (2) “Can Present Iranian Regime Survive? - An Approach to the Challenges for the Islamic Republic of Iran”

司会：吉村慎太郎（広島大学）

報告1：黒田賢治（京都大学）“Religion and Politics in Contemporary Iran: Based on the Political Landscape in the Islamic Jurists’ Society under Khamenei’s leadership”

報告2：アレズ・ファクレジャハニ（東京外国語大学）“Challenges of Iranian Society, Green Movement and Civic Networks”

報告3：坂梨祥（日本エネルギー経済研究所）“The Impact of the Economic Sanctions

### 【公開イベント・シンポジウム】

今大会は、岡真理会員の脚本・演出による朗読劇という、異色の公開イベントで幕を開けた。3.11の衝撃によって、現在進行形の“アラブ革命”に対する関心すら薄れてしまった感があるこの時期に、二年以上前のイスラエルによるガザ攻撃を題材とした朗読劇が、どのような意義を観る者に示しうるのかという点に注目しつつ、上演時間90分という力作を鑑賞した。

この劇の脚本は三つの異なるテキストから構成されており、その一つは、ガザ攻撃の最中にその惨禍を世界に向けて発信し続けた、ガザ在住のサイド・アブデルワーヒド教授の『ガザ通信』。二つ目は、パレスチナ人作家ガッサーン・カナファーニーが、1956年に発表した短編小説『ガザからの手紙』。三つ目は、国際連帯運動に加わり、イスラエル軍のブルドーザーに轢かれて短い生涯を閉じたレイチェル・コリーさんが、ガザから母国アメリカの家族や友人に書き送ったメール。私にとってはいずれも既知のテキストではあったのだが、それらが互いに交差し、響き合い、さらには複数の俳優の身体を「くぐる」ことによって、新たな意味合いと直接性を帯びて語りかけてくる、そんな経験であった。

メッセージを身体にくぐらせることの大切さ。これは、朗読劇を受けてのシンポジウムで、細見和之氏から指摘があった点である。我々は日々、膨大な情報の流れの中に置かれており、たとえば包囲下のガザ地区から届けられたアブデルワーヒド教授の悲痛な叫びも、そうした情報の一つとして多くの人々の目の前を通り過ぎていったのかもしれない。だが、この朗読劇の中で俳優を通じて肉声を得たそのメッセージは確かに、我々の身体に直接触れ、より深い部分での理解と共感をあらためて呼び起こす力を増していたように思う。

また鶴飼哲氏からは、パレスチナを「リンチ」しているに等しいイスラエルの暴力は、我々すべてに向けられている挑戦であるとの指摘があった上で、だからこそ、複数の俳優と観客が共同で作り上げる集合的な試みとしての朗読劇が、個々の人間を結びつけ、共にその挑戦を拒絶する身振りになりうる可能性について、たいへん示唆に富む発言があった。

脚本の基になった三つのテキストがいずれも「手紙」の形式を取っていることに着目した太田昌国氏（現代企画室編集者。ラテンアメリカ、民族問題研究）からは、ガザの抱える問題を、時空を超えて我々に配信し続ける「手紙」、中でも発表から半世紀が過ぎてもいまだ今日の意義を保ち続けている、カナファーニーの『ガザからの手紙』のメッセージの力強さと同時に、ガザの困難さの永続性についても、ご指摘があった。

シンポジウムではさらに、パレスチナ・ゲリラと親交を結んだフランスの作家ジャン・ジュネ（鶴飼氏）や、アウシュビッツで殺されたポーランドのユダヤ系詩人イツハク・カツェネルソン（細見氏）、文学的な声明で知られるメキシコの先

住民・農民解放運動サパティスタのマルコス副司令官（太田氏）といった、パネリストの各氏がよく知る事例から、文学的な言語表現の持つ力やその役割をめぐって、幅広い議論が展開されたが、ここでは中でも印象に残った論点を二つ、整理しておきたい。

一つは、文学や芸術だからこそ伝え得ることがあるのではないか、ということ。これについては岡真理氏から、文学にはジャーナリズムとは違い、単なる「事実」を超えた「真実」を伝える力があるのではないかとの想いが、今回の朗読劇制作を後押ししたとの説明があった。3.11の震災についても、津波が押し寄せる映像や被災者の声を、報道を通じてリアルタイムで視聴しているにもかかわらず、実際には我々は、大切なことを「何も見ていない」のではないか。映画『ヒロシマ・モナムール（二十四時間の情事）』の有名なセリフ「君はヒロシマで何も見なかった」を引き合いに出しつつ、文学や芸術によってこそ可能になる、深い理解や共感の可能性が岡氏によって指摘された。

もう一つは、人はなぜ文学や芸術を必要とするのか、ということ。これについては、ワルシャワ・ゲットーで滅びの時を待つという極限状況に置かれながら詩を作り続け、しかもそれを周囲の人々に読み聞かせていたという、細見氏が紹介したカツェネルソンの事例に学ぶところが多かった。芸術の創造というものは、おそらく極私的で孤独な作業であると思われるのだが、それは同時に他者に向けられた呼びかけでもあり、最初から「共に」というベクトルを孕んでいる。だからこそ文学や芸術は、作り手だけでなく、その受け手をも含めて「共に」人間性を保ち、回復する機能を持ち得るのであろう。細見氏は、文化的な活動に価値を認めるようになることで、シオニズムは変質し得るのではないかと指摘したが、同じことはパレスチナの側でも多くの人々によって思索され、実践されてきた。たとえば、会場で配られたパンフレットでも言及されていた、ジェニーン難民キャンプ「自由劇場」のジュリアーノ・メール・ハミース監督も、そうした文化や芸術の力を信じる一人だった。そんな彼が今年3月、地元の武装勢力によって暗殺されたことはあまりに皮肉であり、パレスチナを取りまく圧倒的な暴力という現実をあらためて突きつけるものではあったが、同時に、文化や芸術がそうした暴力にまみれた現実を根源から揺るがす可能性を持つことを、逆説的に証明してみせたともいえる。

このようにこの日の朗読劇とシンポジウムは、3.11以後の現実を生きる我々にとっても、様々な示唆を与えてくれる場になったと思う。 （山本薫）

## 【研究発表会場から】

### 第1部会

まず、午前の最初は森山央朗氏による発表「ホラーサーン系「ハディースの徒」：その活動と影響」であった。これはイラクで活躍し、ハンバル派の母体につながると理解されがちな「ハディースの徒」ではなく、10世紀のホラーサーンにまで

遡及可能な学統に連なるハディース学者たちを研究対象としたものであった。ウラマー社会の研究であるだけでなく、地域を超えた知識人の移動と知の伝達、その育み方を考察する刺激的な発表であった。また、歴史研究にいかにかハディース研究を援用してゆくかと言う点でも、興味深かった。なお、近年の同氏による研究は全般にこのようなレベルの内容を維持している。

次いで、松本隆志氏による発表「ウマイヤ朝史叙述に内在するストーリーの分析—ホラーサーン総督ヤズィード・ブン・アルムハッラブ解任の叙述について—」があった。これはウマイヤ朝史研究にナラトロジーの手法を導入しようと明確に意図されたもので、その意欲と斬新さを高く評価されるべきであろう。今回はその題材として、ウマイヤ朝中期にホラーサーン総督であったヤズィード・ブン・アルムハッラブの解任をめぐる叙述が俎上に乗せられた。結果、各史料における記述法や人物評価、形式と成立ちの違いなどが浮き彫りとされた。今後はこの手法の有効性をさらに如実に証明する素材の吟味と、方法論のさらなる深耕が大いに期待されよう。(大稔哲也)

中野さやか「ウマイヤ朝とアッパース朝の宮廷歌手達の役割と立場に関する考察」は、アブー・ファラジュがジャーヒリーヤ時代から9世紀までの詩人や歌手の事績を綴って『アガーニー』をもとに、宮廷歌手の師弟関係の系譜を分析するものである。系譜の詳細な分析から、ササン朝宮廷からメディナに伝わった音楽が、ウマイヤ朝宮廷を経由し、ジャーリヤ(女奴隸)やカリフのナディームとなった歌手達によってアッパース朝宮廷で発展していったことを示した。発表で後半の歌手達の社会イメージの部分を省略することになった点が残念であったが、歴史研究者の文献史料にもとづく発表に対し、会場の音楽史の研究者から専門的な質問がだされた。

小野仁美「イスラーム法におけるイフティラーフ」は、法学者の見解の相違(イフティラーフ)が、法学派の固定やイスラーム法の硬直化をもたらしたのかという問題を、再婚した母親の子どもの監護権をめぐるマリーク派の議論を例に検討した。まとめとして、通説の変更は、既存の異なる学説(イフティラーフ)からの選択という形をとり、イフティラーフはむしろ法理論の変化の原動力となっていたのではないかと結んだ。質疑では、イフティラーフとして認められるものと認められないものの違いはどこにあるのかという基本的な質問とともに、前近代ではアクロバティックな見解がなされても学派は壊れなかったわけでそれがなぜかを問うべきではないか、という意見もだされた。(三浦徹)

角田紘美氏「『コルドバ歳時記』に見えるアンダルスのキリスト教祝祭日」は、10世紀頃に成立したとされる『コルドバ歳時記』のラテン語版とジュデオ・アラビック版を比較して、前者のもととなったアラビア語版の存在を想定し、次いでアンダルスおよびマグリブの諸アンワー暦との比較から、同書の聖人祝祭日の記

述の多さを指摘し、さらに同書に記述されたキリスト教聖人祝祭日を検討して、北方キリスト教諸国の祈祷書の暦との共通性とコルドバの独自性を明らかにし、アンダルスの地域的特徴に関わる視点を提起した。質疑応答では、アラビア語版の成立事情や、各種写本の読み手などについて議論された。

辻明日香氏「マムルーク朝期エジプト・デルタ地方におけるコプト集落：コプト聖人ユハンナー・アッルッバーンの足跡を中心に」は、11-14 世紀デルタ地方のコプト教会主教座の分布と変容の概観から、13・14 世紀に教会活動が部分的に拡大した可能性を指摘し、次いでこの時期のコプト聖人ルッバーンの伝記をもとに、彼の移動の特徴と、彼が訪れた土地の状況を検討し、織物産業が発達した都市のコプト人口およびガルビーヤのコプト集落の多さを指摘し、中世エジプト社会の多様性という視点を提起した。質疑応答では、ルッバーンの奇蹟や彼と対立した人々、ルッバーンの名前の由来、コプト聖人の一般的特徴などについて議論された。

茂木明石氏「聖者伝史料に収録された『シャーフィイー言行録』から見たイマーム・シャーフィイーの「聖者」イメージの変容」は、イスバハーニー、アッターール、シャアラニーによる聖者伝の関連記述を比較検討しつつ、シャーフィイーのイメージが、預言者の言行に忠実な聖者から、スーフィー的な倫理・道徳の模範としての聖者へと変化したことを指摘した。質疑応答では、伝承の取捨選択など聖者伝の特徴および書き手の傾向の問題や、史料中の用語の解釈などについて議論された。(堀井優)

## 第2部会

飛奈裕美氏の「エルサレム市におけるパレスチナ人の政治参加：選挙参加の是非をめぐる議論を中心に」は、東エルサレムのパレスチナ人による市政選挙への参加／ボイコットがパレスチナとイスラエルの双方からどのように認識されてきたかを論じた。1987 年と 2000 年の 2 つのインティファダのあいだにパレスチナ人たちの抵抗はナショナルからローカルなレベルへと重心を移したとされる。こうしたなかで彼らは選挙参加と選挙ボイコットの二つの異なる戦略を打ち出していく。しかし、参加は民主政における少数派としての固定化、他方、ボイコットは「土地を併合し人間を併合しない」というイスラエルの政策理念に合致してしまうジレンマを抱えているとされた。報告後には、「ナショナル」の範囲やパレスチナ人の投票率をめぐる解釈についての質疑が行われた。

佐藤寛和氏の「パレスチナ難民問題とダレット計画の不可分性に関する論争：伝統的史観に挑戦する「新しい歴史家」の諸相」では、イスラエル建国戦前の直前（1948 年 4 月から 5 月）にかけて実行されたダレット計画がパレスチナ難民の発生にとっていかなる意味をもったのか（もたなかったのか）について、ベニー・モリスとイラン・パペの 2 人の「新しい歴史家」の語りを対比させ考察したものであった。モリスが難民の発生を戦争に随伴する現象として捉えるのに対して、

パペ、はダレット計画に意図的なパレスチナ人「追放」の論理があったとし、モリスの議論がイスラエル建国の原罪性を隠蔽していると批判する。佐藤氏は両者のこうした議論がナクバの存在を前提とする実証的なイスラエル歴史研究の萌芽であると評価する一方で、これにともないナクバ自体の正当化や「ユダヤ国家／民主国家」の矛盾の解消のための新たな語りが生み出されてきたと指摘した。フロアからは、史料の解析に依拠したモリスとナラティヴを重視するパペのあいだに歴史研究の方法論上のねじれがあるのではないかといった疑問が呈された。

(末近浩太)

田浪会員は、イスラエルの言語政策をテーマに、同国のアラブ人児童用教科書を分析した。ヘブライ語とならぶ、この国の「公用語」アラビア語が、子供のテキストでどう使われているかに注目。アラビア語の小学5年生用国語教科書を、ヘブライ語のものと比べ、さらに、パレスチナ自治政府とヨルダンが使っているアラビア語教科書とも比較した。そして、イスラエルのアラビア語教科書では、人名、地名などの固有名詞の使用が極端に少なく、また、人物などの描写がまったく貧弱・無味乾燥であることを例証。こうして「アラブ」の自己意識の核「アラビア語」が貶められていると論じた。フロアからは、東エルサレム、私立学校、ユダヤ人とアラブ人の共学校などで使われる教科書との比較などについて、質問が相ついだ。

役重会員は、矢内原忠雄のシオニズム観を論じた。彼は、日本の植民政策学界では異色のリベラルなクリスチャンだったが、その思想的基盤には、キリスト教シオニストとして「聖書の民族主義的解釈に基づく植民地観と民族・国家観があった」ゆえ、移住植民地パレスチナの『原住民』の民族的権利に思い及ぶことはなかった、と指摘した。

(奈良本英佑)

佐々木紳氏の「近代オスマン人の帝国意識——帝国的知識人としての新オスマン人——」は、1860-70年代に立憲運動や新文学運動を展開した新オスマン人の意識に焦点を当てる。彼らは、クレタ問題にヨーロッパ列強が干渉したことにつき、帝国主義を展開する列強自身の行為には互いに全く介入していないと、そのダブル・スタンダードを非難し、オスマン帝国が文明国として遇されていないことへの不満を述べて、イスラーム国家たるオスマン帝国も文明諸国の一員たりうると主張する。そして、新オスマン人のこうした議論に通底する、治者としてのムスリムという意識が、彼らの帝国意識であったと結論づける。発表終了後、多くの質問が寄せられ様々な問題があぶり出されたが、発表者自身も課題としてあげるように、帝国主義の客体でありながら主体でもあったオスマン知識人の思考様式をどう捉えるかといったテーマ等について、今後の研究に向けた展開がまたれる。

山下真吾氏の「オスマン朝の歴史書にみられるオスマン朝の優越性の議論」は、

オスマン朝の興隆期に当たる 15 - 16 世紀中葉までの歴史書を渉猟し、オスマン朝に興隆と優越性をもたらした要因が、それらの史書ではどの様に述べられているかについて整理し分析した研究発表であった。対象とした史書に共通して見られるのは、オスマン朝諸君主の徳が、先行する諸王朝に優越する根拠であり、その徳は、公正あるいはシャリーアによる統治と聖戦とからなっていたとする。従来、オスマン朝史書の特徴は聖戦の強調にあったとされてきたが、公正を含むその他の徳も重視されていたと結論づける。本発表の先にどのような地平が開けるのか、今後の研究の進展に期待したい。

新井春美氏の「トルコの対外政策におけるアイデンティティの展開」は、1960年代におけるトルコの国家アイデンティティがいかなるものであったかを、当時の世界情勢の中から読み解いた研究発表であった。この時期にトルコ共和国では、キューバのミサイル危機による対米不信やキプロス問題を契機にアイデンティティ・クライシスが表面化し、ソ連や中東諸国との接近が見られて外交が多角化したものの、西側優先の原則は維持されていたと結論づける。1970年代以降に関する研究がこれからの課題と発表者自身が述べているように、現在に至るまでのトルコの外交政策について、今後分析が進められると期待される。（堀川徹）

### 第3部会

三代川寛子氏の報告「コプト正教会の政治的役割—サーダート政権とムバーラク政権期の比較」は、サーダート・ムバーラク両政権とコプト正教会の関係性を中心に、コプト正教会の政治的役割を考察するものであった。サーダート政権のイスラーム勢力の利用や宗派对立の激化はコプト教徒の反発を招いた。平信徒の多くはコプト正教会を自らの利益代弁者として支持し、その政治的活動を支持した。政権・コプト正教会の対立は1981年の総主教シェヌダ3世軟禁に至るまで悪化した。一方、ムバーラク政権はイスラーム主義勢力の抑制に努め、コプト正教会との良好な関係を模索した。コプト正教会は同政権を支持する代わりにコプト教徒への便宜供与を受けるというパトロン・クライアント関係を構築した。この結果、コプト正教会の政治的役割は強化されることとなった。両政権のイスラーム主義勢力に対する政策の違いが政権・コプト正教会の関係に強く影響したと三代川氏は指摘した。現代エジプト研究において重要な研究テーマである宗派对立を考える上で、本報告は大いに意義ある内容であった。

福永浩一氏の報告「ハサン・バンナーの著述に見られる歴史観—ムスリム同胞団における思想の変容に関する考察」は、現代中東最大のイスラーム主義勢力であるムスリム同胞団の創設者・初代最高指導者ハサン・バンナーの歴史観について、彼の論考から検討するものであった。バンナーの著作では、預言者や教友が理想像として描写され、その宗教的情熱や使命感が規範として称揚されている。これはサラフィー主義思想家と共通する特徴であり、バンナーは同胞団活動においてこれを指針として頻繁に引用している。また、イスラーム世界衰退の理由は

ムスリムが初期世代の精神を忘れ墮落したためと、バンナーは繰り返し述べている。彼はその処方箋として、ムスリムの倫理的側面の回復を訴え、団員にその実現を求めた。このように、バンナーの歴史観は同胞団の活動指針や規範として投影されているとの指摘がなされた。バンナー思想研究は、その重要性に比して研究蓄積が少ないテーマである。福永氏のさらなる研究の発展が期待される。

(横田貴之)

一人目の報告は“Jordan in International Relations: Security, Economy, and State Interests” 吉川卓郎会員（立命館アジア太平洋大学）であり、「緩衝国家」とされるヨルダンの外交を、対イスラエル交渉、パレスチナ、経済の脆弱性といったファクターに注目し、国際レベル、国家レベル、個人レベルに分けた上で、最近のヨルダンの GCC への加盟をめぐる議論を一つの事例としてとりあげ、そのメリット・デメリットを指摘した。フロアからは、GCC への加盟が持つ対テロ対策などをめぐる安全保障面での影響に関する質問や、イスラエルによる安全保障上の脅威は実質的には存在しなかったのではないかとの指摘を含めた質問が寄せられた。

二人目の報告は佐藤紀子会員（釜慶大学）が「イラク難民と移住先受け入れ集団との関係—シリア正教会教徒の事例—」というテーマで、シリアのキリスト教徒コミュニティによる難民受け入れの実態を、主にアレッポのキリスト教徒主体の援助団体による IT 技術取得訓練コース受講をめぐる難民の対応に関する現地調査の結果をもとに報告した。本報告では、受け入れ側のシリアのキリスト教徒と難民側の期待と難民側の期待のずれに注目し、難民の社会的な受容の困難性を浮き彫りにした。フロアからは、ICDL の教育の内容やパレスチナ難民への対応も含めたシリア政府の難民受け入れ態勢についての質問や、キリスト教徒のシリアへの帰属意識などに関する質問が寄せられた。

三人目は白谷望会員（上智大学 J）が「現代モロッコにおけるイスラーム主義政党の政治戦略—政権獲得をめぐる意思決定過程—」というテーマで報告した。本報告は、モロッコのイスラーム主義政党「公正開発党」の政治戦略を、候補者擁立の問題に注目し、いくつかのアラブ諸国のイスラーム政党の戦略との比較の上で検討し、同党の政権獲得志向の強さを指摘した。また、Gアリソンの政策決定モデルを援用しつつ、イスラーム政党の政権獲得をめぐる医師検定には基盤組織（MUR）と政治との関係が重要と指摘した。フロアからは、候補者数と当選数の期待値は必ずしも連動しないのではないかとの質問や、イスラーム政権政党としてのハマースの評価や基盤組織と政党との関係の内実等に関する質問が寄せられた。同時内の興味深い他部会の報告との競合にもかかわらず、平均して 20 名程度の参加が得られた。

(北澤義之)

#### 第4部会

第1発表は、竹村和朗氏の「エジプト口語アラビア語の諺—我々はどうにしてそれを理解できるのか—」で、エジプト社会を理解する上で諺の理解は一つのアプローチであるとし、現在でも通用すると考えられる諺124篇を「通文化の諺」と「異文化の諺」に分類し、さらに前者は単語数による分類が試みられ、また後者は主題別に6つに分類され、このような分類方法が諺の理解に有効である旨提案された。質疑応答では、古典の諺について言及がないことに関し指摘があり、今後の課題が提示された。

次の発表は、鷺見朗子氏、鷺見克典氏両氏による「アラビア語習得とアラブ文化への興味—アラビア語専攻学生と非アラビア語専攻学生の比較検討—」で、アラビア語学習者のニーズに合わせた学習内容や方法を見出す必要があるとして、これまで実施したアラビア語専攻学生と非アラビア語専攻学生に対する調査で抽出された数値とその分析結果が示され、そのなかで学生が習得を希望しているものと教員が重視しているものが必ずしも一致しないとの興味深い結果が報告された。質疑応答では、ジェンダー別の分析も一方法ではないか、あるいは学習者の学習レベルも分析される際に考慮されるべきではないかといった意見が出された。  
(宇野昌樹)

第4部会の第3発表は竹田敏之氏の「現代アラビア語の展開とハット（アラビア語書道）の隆盛——文字改革と活字書体の開発を中心に」であった。近代になりアラブ世界も活版印刷の時代に入り、活字の開発と共に文字改革も様々になされた。竹田氏はその歴史を民族主義運動やワタニーヤとも絡めて研究発表された。そうした歴史の中で30年代から40年代にかけて、文字改革の試行される中でラテン文字化の運動もあったことには驚かされた。文字改革の推進者や団体に言及し、母音も子音文字の中に書き込む字体や王冠書体など、多くの事例を出されて説明され、具体的で説得力があった。最後にハット（アラビア語書道）の隆盛とスラム（コーラン綴字法）の根強い支持と美意識は活字改革にも向けられていることを述べられた。会場からはヌクタ（子音明別点）の煩雑さや紛らわしさ、すべて続け文字にして単語の終わりを明らかにするなどの文字改革はなかったのか、などの質問があった。

第4発表は鈴木珠里氏の「フォルグ・ファッロフダートの詩的空間・詩的イメージの分析——ヨーロッパ旅行記『異国にて』“Dar Diyari Digar”を手掛かりに」であった。鈴木氏は先ず1967年32歳で早世した詩人フォルグの伝記を紹介した後、作品の解説を行い、主題の『異国にて』の分析に入った。『異国にて』の概要、フォルグ作品研究におけるこの作品の位置づけを行った。詩的空間の把握として、他の作品4点との共通の詩的イメージを分析された。ついで『異国にて』の作品における独自の空間イメージとして「高さ」、「頂点」、「地平線」の3点に絞って詩作品の例を挙げ、旅行以前には見られなかった「上から」の視点、

高さや空間のイメージが新たな詩興を切り開いた、フォルグの詩的空間・詩的イメージの広がりや飛行機体験もその大きな要素であった、と分析された。最後に『異国にて』に見られるフォルグの原点を4点にまとめて説明された。会場からはフォルグの詩的空間・詩的イメージの分析においては山などの起伏があるか、砂漠など空漠とした所か育った自然風土で随分異なるのではないか、フォルグの作風の転換点は58年の『反逆』と観て良いか、などの質問があった。

(堀内勝)

個人研究発表午後の部、第4部会は、田熊友加里会員の「19世紀末ベルリンにおける絨毯収集家とオリエント観の形成——ジェームズ・サイモン(1851～1932)とその一族を事例として」、後藤絵美会員の「現代エジプトにおける芸能人女性の「悔悛」と夢——ヴェール着用を支えた出来事と思想について～」、千葉悠志会員の「アラブ諸国における情報独立の動き——通信社・通信組織に着目して——」の3つの発表があった。

田熊報告は、ベルリン出身のユダヤ系織物商人ジェームズ・サイモンとその従弟エドワード・サイモンをとりあげ、19世紀末のドイツにおける東洋学の発展および中東イメージの形成において、これら個人収集家が、美術館に個人コレクションを寄贈するだけでなく、ベルリン美術館総館長やキュレーターと密接な関係を維持しながら、中近東における発掘調査に資金を提供するなど積極的な役割を果たしたことが図像とともに紹介された。異文化に関する知の形成機構としてのミュージアムが果たした役割についてはつとにさまざまな研究がなされているが、その展示物ないし知がどのようなプロセスを経て収集・形成されているかの一端を明らかにしており興味深い。

ムスリム女性のヒジャーブ着用についてはあまたの議論がなされてきたが、後藤報告は、これまであまり考察されることのなかった、人気のあるエジプトの女性芸能人がある日突然ヴェール着用を決断し、芸能界を引退するというエジプト固有の社会現象に注目し、彼女たちの「語り」、とくに「夢」の語りの分析を通して、彼女たちのヒジャーブ着用には、彼女たちが内面化している宗教世界が関係しているのではないかという議論を提起している。

中東の通信社と言えば誰しもアル＝ジャジーラを想起するが、千葉報告は、現実には百花斉放とも呼ぶべきアラブ諸国の通信機構のダイナミズムについて紹介している。これまでCNNをはじめ欧米の通信社に独占されてきた中東に関する情報を、アラブ諸国自らが積極的に発信することで世界的な情報格差が解消されると同時に、自国を批判する域内の報道に対する対抗言説の報道も可能となり、情報戦が戦われていることが分かる。

3つの報告のいずれも興味深い内容だったが、テーマ的な統一性をもたない最終パネルだったこともあり、聴衆の数に比して必ずしも活発な質疑がなされなかったことが残念である。

(岡真理)

## 第5部会

第5部会は、北アフリカ史分野の研究発表から始まり、まず渡邊祥子さんが「モスクから議会へ、議会からモスクへ：第二次大戦後のアルジェリアにおける政教分離法適用問題とウラマー協会の『政治化』」と題して報告をされた。ウラマー協会についての先行研究ではその活動がアルジェリアの独立戦争という解放史観の射程内で捉えられてきたのに対し、本研究では特に第二次大戦後に焦点をあて、その時期に既に同協会が民族解放や独立闘争とは別に、政教分離法適用による公認イスラーム政策に対して、宗教の独立を要求する政治化の動きを展開していたという新しい見解を示された。ウラマー協会機関誌『バサーイル』やアルジェリア議会議事録を史料として駆使し、同協会による信徒団体結成や年次宗教会議の開催、高等イスラーム議会設置の提案さらにモスク占拠という実行使を例に挙げ、その政治化過程を検証するという大変意欲的で論旨も明快な報告であった。続く関佳奈子さんは「スペイン領モロッコにおける『独立戦争』再考 - 指導者アブドゥルカリームの言説を手がかりに-」と題して報告された。リーフ戦争(1921-26年)の指導者の書簡やインタビュー記録を史料として用い、その言説分析からこの戦争についての再考を目的とした研究である。先行研究で不十分にしか扱われてこなかった指導者本人の言語解析により、リーフ戦争がリーフ共和国というモロッコ独立とは異なる目的をもった闘争であったこと、それがまたタリーカのシャイフやスルターン、「モロッコ」といった複合的構造からの「独立」をも求めるものであったという点を鮮やかに示された。それぞれの報告に対しては、フロアーから研究の鍵概念や論旨についての質問・コメントも複数あり、持ち時間終了まで活発な質疑応答がなされ、充実したセッションとなった。双方とも若い研究者の今後の研究展開と活躍が楽しみに思われる報告であった。(鷹木恵子)

第5セッション午前の部後半では、二つの報告が英語で行われた。韓国外国語大学の Kangsuk Kim 氏は、“Limited Impact of Cold War in the Middle East and the Failure of Eisenhower’s Containment Policy: U.S. Misperception of Nasserism under Israel Lobby and the Failure of Baghdad Pact”と題した報告で、1955年に形成されたバグダード条約機構が失敗に終わったのはなぜかという問題を、冷戦構造下の米国の対中東政策とエジプト、イスラエルの思惑のずれに着目して説明した。アイゼンハワー政権は、ソ連を封じ込めることを目指してバグダード条約機構を形成したが、エジプトはイスラエルに対抗する必要性からアラブ連盟に基づいた地域安全保障システムの構築を希求していた。一方で、イスラエルも、ロビー活動に基づいて、バグダード条約機構に反対した。それゆえに、氏は、冷戦構造が中東政策に限定的なインパクトしか与えず、バグダード条約機構が地域安全保障システムの構築の観点から失敗に終わったと結論づけた。これに対して、冷戦の影響が限定的だという議論は、どの時代に適応可能か、イスラエルのロビー活動とは

具体的にどのようなものだったのか、などの質問が出され、活発な議論が行われた。

国際協力機構の星光孝氏は、“Labor-export in the Arab Republic of Egypt: The Effect of Emigration Policy, Labor Policy and their Interrelatedness on Labor-export” と題した報告で、国外からの送金受領額が常に 10 位以内のエジプトを取り上げて、同国の労働力の国外移動と、移民政策や労働政策との関連性について考察し、エジプトの労働力輸出の推進度を分析した。エジプトはこれまで、失業問題への対処策として、労働力を国外に移動させるという政策を利用してきた。だが、国外からの送金受領者が多いのは、エジプト政府の労働力輸出という政策の制度設計の帰結ではない、と主張した。氏は、エジプト政府の政策・制度が確立された結果としての労働力輸出ではないため、その利益も限定的なものにとどまっていると結論付けた。これに対して、世論調査を参照するべきであることが指摘された。また、フィリピンの事例と比較して、なぜエジプトでは労働力輸出の政策を整備できないのか、移民はどのように定義しているのかなど、多くの質問がフロアーから寄せられ、活発な議論が展開された。(山尾大)

午後の部ではまず、栃堀木綿子氏の「アミール・アブドゥルカーディル・ジャザーイリーの生涯と思想におけるジハード論」で、アルジェリアで対仏武装闘争を率いたスーフィーとして知られるアブドゥルカーディルのジハード論の検討から、彼の思想と行動との関係が考察された。まず思想について、氏は彼の著作『諸階梯の書』の中のジハードに関する議論を整理したうえで、そのジハード論の特徴として、小ジハードと大ジハードが不可分とみなされていること、またジハードがイスラームの基本的な宗教実践の一つと理解されていることを指摘した。次に思想と行動との関係について、氏は主に彼の武装闘争中の発言を分析したうえで、彼の行動が一貫してそのジハード論に裏付けられたものであったこと、またそこではジハードと並んでヒジュラという概念が行動理念として重要な役割を果たしていたと結論付けた。

私市正年氏の「1940 年代末の Zāwiya al-Hāmil の青年たちとアルジェリア・ナショナリズムの思想と運動—新史料「al-Rūḥ」誌の予備的考察」では、1948 年にハーミルのザーウィヤの青年たちが極秘に作成・回覧していた『al-Rūḥ』誌の紹介から、アルジェリアのナショナリズム思想・運動とスーフィー教団との関係の見直しが図られた。氏はまず、従来の研究ではアルジェリアのナショナリズム思想・運動の形成におけるウラマー協会の役割が注目されてきた一方で、スーフィー教団との関係がほぼ等閑視されてきたことを確認したうえで、しかしながら氏が新たに発見した『al-Rūḥ』誌においては独立戦争のイデオロギー的特徴であるアラブ的・イスラーム的武装闘争が説かれており、そこから、特に文化的ナショナリズムの形成においてはスーフィー教団も一定の役割を果たしていた事実を指摘できるとした。

石田友梨氏の「初期スーフィズムにおける霊魂論と修行論の関係性—フジュウ

イーリーの『隠されたるものの開示』における魂 (nafs) の概念より」では、フジュウィーリーの提示した魂の概念の分析から、スーフイズムの靈魂論と修行論との関係が考察された。まず魂とは人間を構成する実体の一つであり、それは欲望を属性とする悪の根源である。修行の目的はこの欲望を消滅させることにあるが、実体である魂そのものを消滅させることはできない。従って修行には限界があり、人間の救済は最終的には神の恩寵を必要とする。氏は、このように魂を実体とする理解から神の恩寵を不可欠とする修行論がフジュウィーリーの思想の特徴であり、これは例えば修行によって救済が可能であったとしたトゥスタリーの修行論とは大きく異なる点であると結論付けた。(高橋圭)

## 第6部会

堀抜功二氏の発表「アラブ首長国連邦におけるアブダビ・ドバイ優位体制と首長国関係—連邦体制の再検討から—」は、アラブ首長国連邦の政治システムを、連邦を構成する7つの首長国との関係の視点から検討したものである。報告では、前半でアブダビとドバイを中心にして作られている連邦制度の概要が紹介され、後半部分で連邦政府と首長国間の管轄権をめぐる相違と対立が取り上げられている。連邦政府と首長国の政治システムの二重構造を、不動産取引、外交・貿易をめぐる対立などから解き明かそうとしたものである。アラブ首長国連邦は研究に必要な情報が少なく分析しづらい国であるが、配布資料に含まれていた参考文献リストは同国の連邦制を研究しようとする者にとって有益であろう。連邦と首長国の関係を解き明かす上では、法の成立過程を含む法制度や、政策決定過程を含む政治の側面などに焦点を絞った切込みが有効で、今後の課題として期待されよう。

近藤重人氏の「第一次石油危機時のアラブ諸国間外交—アラブの石油戦略形成に果たしたクウェートの役割：1971~1973年—」は、第4次中東戦争に際してアラブが発動した石油戦略に関し、クウェートに注目してアラブ産油国が果たして役割について見直そうとしたものである。報告では、まず先行研究の整理と問題意識の提示が行われ、続いてクウェート外交の特徴と第4次中東戦争に向かう時期のクウェートの内政外交の動きが検討され、そして、アラブの石油戦略形成に際してクウェートが果たした役割について検討されている。当時の石油戦略は、これまではサウジアラビアのファイサル国王によって主導されたとの見方が一般的であったが、クウェートの動きを丹念に見ることで、石油戦略発動ではクウェートが重要なアクターとしてあったことを明快に示している。(福田安志)

上山一氏「GCC諸国におけるイスラム銀行業の費用効率性」は、近年競争が激化しているイスラム銀行業の今後の再編動向を探るという意図のもとに、GCC諸国のイスラム銀行27行の規模別グループにおける費用構造と、全体の経営効率性の分析・評価を行うものであった。9年分のデータを用いた費用構造の分析

からは、業務の多様化に遅れる上位行、業務拡大に積極的で国際金融危機の影響は限定的であった中位行、高リスク・高収益を追求する下位行の姿が明らかにされ、また経営効率性の分析からは、各行の経営に未だ改善の余地のあること、リスク対策としての貸倒引当金の増加が銀行の経営効率を悪化させた事が明らかにされた。

報告に対して、財務諸表に於ける連結の状況、銀行を規模別に区分した際の基準、銀行の所有形態の違い（民間所有か支配家族所有か）や、イスラーム銀行業の発展と政治的意図との関わりがイスラーム銀行の財務に及ぼす影響、イスラーム金融専門銀行とイスラーム金融窓口業務を行う在来型銀行間の競争とイスラーム金融専門銀行間の競争の区別など、多面的な質問が交わされた。なお、興味深い研究にも拘わらず、効率性の分析手法の説明とそれに関連する先行研究リストが、報告では残念なことに省略されていた。

川村藍氏「イスラーム金融をめぐる法の二元性と民事紛争」は、湾岸諸国とマレーシアを対象に、家族法、相続法等にはイスラーム法が、商取引には西洋法が適用されるという「法制度の二元性」のもとで、イスラーム法に準拠したイスラーム金融の発展が生み出した新たなタイプの民事紛争の現状とその処理における問題点を明らかにするものであった。報告では、特に国内の法的枠組みの未整備が、国際的民事紛争の処理においても問題を複雑化させている点が指摘された。

報告に対して、従来の手法で紛争に対応できるのではないのか？ 研究対象を更に限定すべきではないのか？ イスラーム法として可能な対応はないのか？ 紛争事例の約款はどう定められていたか？ 仲裁役として指名されるのはどのような人々か？ マレーシアでは弁護士が問題にすれば問題になってしまう、との質問、コメントがなされ、これらに対し報告者からは、問題の根底には世界観の根本的な相違がある、との見解が示された。二つの銀河が衝突する現場に立ち会うかのような興味深い報告であり、またそれにふさわしい活発な議論が展開された。

（水島多喜男）

報告のうち2本はサウジアラビアを対象とする経済問題を扱ったものである。

最初の萩原淳「石油大国の逼迫するエネルギー事情—サウジアラビアの電力問題と省エネルギーを例として—」は世界最大の産油国でありながら、国内では電力不足問題に悩んでいる現状とその対応の現状を扱っている。現地での実務経験に裏付けられた、地域間の電力系統未統一、発電量・消費のアンバランス、発電能力とピークロードの関係など貴重な報告であった。また Fuel allocation などの省エネ対策が検討されていることも紹介された。今後の課題として、隠れた補助金と絡めたサウジアラビアの「近代化」の特性とその政策をも考慮に入れた成果が期待される。

2 番目の黒宮貴義「二つの石油ブーム期のサウジアラビア経済の比較—オランダ病モデルから得られる示唆」は産油国の産業発展の歪みを説明するモデルとし

て知られる「オランダ病」に関して、1970-80年代と2000年代の二つの時期に関して検証を試み、そこから実践的かつ理論的教訓を引き出そうとしたものである。そのなかで、2000年代を対象とする検証によると、オランダ病を原因とする交易財部門の価格競争力低下は発生していない、また農業、製造業の衰退という現象は見られないとする興味深い指摘があった。オランダ病の前提を理論的に再検討する必要性の指摘と、資源ブームが「オランダ病」的否定的側面を引き起こさないようにするための政策提言を行っている。今日産油国の政策当局者の多くは「オランダ病」を自覚的に対処しようとしていると見られ、この研究は極めて実践的意義を持っている。

3番目の泉淳「米国ムスリムの政治的関与—大統領選挙を中心として」は、米国ムスリムの政治的役割を多面的に検討したものである。報告によると、米国ムスリムをエスニック的にみると南アジア系、アラブ系、黒人など多様であるが、ヨーロッパの移民ムスリムと比較して概して社会的経済的地位は高い。その社会意識は多様性の拡大で特徴づけられるが、同時に「対テロ戦争」や「9.11事件」によるムスリムに対する差別・嫌悪症の高まりに対して敏感である。しかし「アイデンティティ政治」に走ることは留保しており、政治的にはリベラルである一方、社会的保守性を維持するなど複雑である。米国の対外政策において中東の重要性が高まっている一方で、安易な結論を引き出せないこの種の研究の難しさを感じさせるものであった。

(清水学)

## 第7部会

早朝の第7部会では、小島宏氏と野中葉氏による研究発表が行われた。

小島氏は内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付少子化対策推進室による「アジア地域(韓国、シンガポール、日本)における少子化対策の比較調査研究」付帯調査(2009年)に基づいて、シンガポールにおける家族形成行動の宗教的・民族的な差異を分析した。その結果、ムスリム男性の同棲経験率はシンガポール男性の平均よりもやや低いものの、結婚経験率は平均より少し高く、既往出生児数は宗教別で最高水準にあること、また女性の場合は同棲経験率・結婚経験率とも平均を上回っており(もっとも、ムスリム女性が同棲を経て結婚する確率は、同棲を経ずに結婚する確率よりかなり低い)、既往出生児数でもシンガポール女性の平均値を一人近く上回って最高水準にあることが明らかにされた。なお、ムスリムであることは男女を問わず、第三子の出生を促進する傾向があることも明らかになっている。

一方、野中氏は、インドネシアの非宗教系大学を中心に展開され、1998年創設の正義党(現在の福祉正義党)の母体ともなった大学ダアワ運動のなかで、1980年代半ば以降盛んに実践されてきた「タルビヤ」と呼ばれるイスラーム学習に焦点をあて、当事者へのインタビューと教材分析をもとに、その歴史と思想、手法を明らかにした。サウジアラビアから戻った留学生が1983年頃ジャカルタの高校

生を集めて始めた勉強会は、高校生の進学とともに各地の大学へと広まり、90年代に入ると教材も整備されて、いまや必修授業「宗教」の一部に採用されている（とはいえ、今日では福祉正義党の現実路線に対する警戒感から、学生たちのタルビヤ離れが進行してもいる由）。それは、10名程度のメンバーから成る小グループが毎週一度、2時間程度学習する形態をとり、学んだ者が次は講師となって教えることで継続的・双方向的な学習を実現している。もっとも、その学習内容はイスラームの基礎とダアワの重要性、より良いイスラーム共同体形成のあり方などに限られ、シャリーアの施行やイスラーム国家の樹立が言及されることはないらしい。

なお、それぞれの発表の後には聴衆との間で活発な質疑応答が行われた。早朝のうえ、東南アジアを対象とする研究発表が続いたことも手伝ってか、聴衆の数は必ずしも多くはなかったが、地域を超えて研究テーマを共有する会員の参集を得て、部会そのものの内容は非常に充実していたと言える。（飯塚正人）

午前の部の後半2本の発表は「科学のイスラーム化」と「知識のイスラーム化」という、共通する課題を扱ったものであった。井上貴智さんは「現代イスラーム世界における『科学の』イスラーム化」と題して、マレーシア国立大学文明的イスラーム研究所が準備している「タウヒード科学」教育の内容を、現地での聞き取り調査に基づいて報告した。研究所が目指している教育の内容の概略は理解できたが、それだけにとどまり、もう一歩の分析がほしかった。一方、松山洋平さんは「イスマーイール・アル＝ファールキーの『知識のイスラーム化』論の射程とその展開」と題して、パレスチナ生まれの米国人思想家とその後継者の思想と活動を紹介し、分析した。文献的裏付けはきちんとしており、聴きごたえのある発表であったが、問題は多岐にわたり、もう一つ整理が必要であったように感じた。

二つの発表は「科学」と「知識」という単語の違いはあれ、イスラームの信仰や思想体系のなかに、近代西欧が発展させてきた知識体系をどのように取り入れるべきかをめぐり、現代ムスリム思想家の緊急の課題を扱ったものであった。取り入れることを「イスラーム化」という。20年ほど前から、ムスリム知識人が参加する学会で、盛んに議論されてきた。この議論に、日本の若い研究者が注目するのは結構なことと思うが、一つ疑問がある。科学や知識をイスラーム化することによって、イスラームの思想は変化するであろうが、イスラーム化することによって科学や知識はどのように変化し、豊かになるのか。その見取り図が示されることがない。今回の二人の発表にもそれがなかったことが残念であった。（後藤明）

平野淳一氏の「イスラーム連帯の新局面―「イスラーム諸学派近接世界アカデミー」と『接近の使信』の事例から」は、パン・イスラーム主義の展開を三つの時

期に区分し、20世紀後半以降～現在の第三期（イスラーム復興）における連帯運動の胎動を明らかにするために、革命後イランが設立した「イスラーム諸学派近接世界アカデミー」の制度的実態と知的特徴を分析するというねらいの報告であった。同アカデミーは学派間の「近接」、すなわち既存の諸学派の緩やかな連帯を目的とし、無学派主義の警戒、タクフィール・ビドアを否定の傾向をもつ点。パン・イスラーム主義第一期の先達思想家の紹介に力点が置かれ、歴史的接続性を見出すことができるなどの点が主張された。会場からはアズハル側ではすでにシーア派法学派の容認の動きがあり、スンナ派からも「近接」のアプローチがあるなどの指摘があった。

生田篤氏の「政治的アイデンティティ」論から見た「福岡マスジド」開堂の過程については、2009年に開設された「福岡マスジド」建設をめぐる地域住民とムスリムとの「協働」の過程と背景を、「政治アイデンティティ」概念を用いて分析するねらいの報告であった。日本のモスク建設ラッシュに関する既存の研究をふまえたうえで、住民とムスリムの交渉における「協働」について、情報意見交換と警察の仲介、それぞれの当事者の考え方とその相互関係について考察し、とくに「政治と文化の混同」と呼ばれる現象の機能について分析した。会場からは、警察の関与、開堂における支援したアラブ大使のモスク訪問の有無などの質問がなされた。

（長澤栄治）

## 第8部会

第8部会の第一報告、子島進氏「信仰に根ざしたNGO活動—イスラーム圏の事例から」は、日常化するイスラーム復興の社会的側面とNGOの世界的な増加・定着が交差する場として、イスラームに根ざしたNGO活動に着目したものであった。NIHU イスラーム地域研究による共同研究の成果もふまえつつ、パキスタンやインドの医療・教育事業、イランの介護事業、ヨルダンの集団結婚式挙行などの事例が紹介され、キー概念としての善行／報奨、活動資金としてのザカート、サダカ、ワクフといった共通項が指摘された。今後の地域間比較研究への展望が期待される報告であった。

続く第二報告、藤本透子氏「ポスト社会主義におけるイスラームの新たな展開—カザフの死者儀礼をめぐる」は、長期のフィールドワークに基づいて、社会主義を経験した現代中央アジアのイスラーム復興の動態に迫ろうとする報告であった。カザフスタンにおいて、人々の関心はクルアーンへの回帰よりも死者儀礼に集中しており、それは死者崇敬というイスラーム前の土着的信仰にイスラームの知識が接合され、かつソ連解体後のグローバル化の中で信仰の正統性を主張するものだとの見解が提示された。フロアからは儀礼と知識をめぐる従来の人類学的理論に一石を投じるような展開を今後期待するとの声があがった。

（帯谷知可）

村上薫氏の発表「トルコ型近代家族とナームス概念の変容」は、イスタンブールの低所得者地区に住む女性を調査対象として、夫婦間および親族内のナームス(性的名誉)概念の近年の変容を分析したものである。報告では、男性が失業や不安定雇用などにより生計維持者としての役割を果たせなくなることにともない、夫による妻子の扶養や親族による経済援助を前提として成り立っていたナームスが夫婦間の愛情の問題や個人的問題になっている現象が指摘された。発表者の長期にわたるフィールド調査に基づくだけに、具体的な事例が数多く紹介され、大変興味深い報告であったが、議論を交わすことによって論がさらに深化、普遍化していくタイプの研究だと思われるので、仕方がないこととはいえ、与えられた質疑応答時間が短すぎたことが惜しまれる。

タシ・メメティ氏の発表「ホスト社会再考—トルコにおける政府や社会団体とウイグル人移住民の相互関係から—」は、民族系団体(ウイグル文化協力協会)を媒介とした、トルコ社会とウイグル人移民の相互関係を分析したものである。ウイグル人のような「トルコ系」移住民をどのようにトルコ国家が受け入れ、処遇するかという問題は、改めてトルコにトルコ人の定義をめぐる問題を突きつけている。発表では、発表者自身のカイセリのウイグル人移民コミュニティーの調査に基づく情報も披露された。今後の研究の進展が期待される発表であった。

(粕谷元)

「英国占領下のイラクにおける反英抵抗ネットワークと政治運動—1920年反乱」の前後に焦点を当てて」と題して発表を行った増野伊登氏は、この反乱が「超宗派的・超地域的協力体制」あるいは「イラクにおけるナショナリズムの萌芽」であったものの部族蜂起による略奪行為によってその気運が損なわれたが故に、「未熟なナショナリズム」、あるいは「確固たる国家統合理念の欠如」と評価する先行研究を紹介した後、部族蜂起以前の運動における個々の政治デモや集会での政治理念や大衆動員、宗派性や地域性の越え方と言った諸面において英国公文書や英国官僚の私文書を史料とした綿密な考察を行う余地があると説き、かかる事例研究の結果として、この運動が単にイスラーム内部だけでなくユダヤ、キリスト教徒の枠も越えようとしていたこと、しかし独立の具体案については見解の統一が見られなかったこと、また、民衆的関心の一過性、といった側面があったことを指摘した。また、イラク—国主義というこれまでの評価や、スンナ派・シーア派両派による宗教儀礼の共催についても再検討の余地があると説き、総じて部族蜂起以前におけるバグダードでの政治運動は、多様なイデオロギーの入り交じった柔軟な運動であったとの見解を提示した。フロアからは、シーア派儀礼ターズィエがラマダーン月に行われた理由について、示唆に富む指摘が為されたほか活発に質疑応答が為された。

黒田賢治氏の発表「現代イランにおけるハウゼ教育と法学権威の再生産メカニズム—修了課程の講義を手がかりに—」では、現代シーア派における法学権威の

再生産プロセスの検証が試みられた。氏はイランのゴム市において参与観察を行った結果、高位法学者によって行われる法学者教育修了課程の講義が『諸問題の解説集』のプロトタイプである『固き絆』の解説及び自らの見解提示であり、この講義を行うことによって法学権威になるための資格の一つとされる『諸問題の解説集』執筆の大半が可能となること、つまり法学権威の再生産プロセスの一端が教育行為と関係することを、参与観察に基づく資料や写真を示しながら報告した。ゴムのシーア派宗教界に対するフィールド調査はかつてイラン革命直前に M.M.J. Fischer によってなされたことがあったが、爾来稀少な報告と言える。

(富田健次)

### 企画セッション

企画セッション1の日本中東学会・韓国中東学会合同企画セッションでは、Dae Sun KIM 韓国中東学会会長および Chong Jin OH 韓国中東学会国際交流委員長(いずれも韓国外語大学トルコ学科の所属)による二報告が英語で行われた。

まず KIM 報告はアタチュルク期トルコの近代化における教育政策を論じたものであった。報告者はまず近代化論の概要を説明した上で、共和人民党の教育綱領のうち、とりわけ国民主義、世俗主義、人民主義に基づく教育に焦点を当てた。最重要の国民主義については1933年のダールルウルームの廃止とイスタンブール大学の設立に注目した。世俗主義ではメドレセの廃止と女子教育の導入、また人民主義教育ではラテン文字の導入と大学教育の重要性を強調した。そして政府による上からの積極的な教育機関への介入が必要だったと結論した。しかし、ムスタファ・ケマルは限られた時間で急激な上からの近代化政策を推進したため大衆の自発的な参加を促進することには失敗したと評価する。報告者は国家の延命のためには闘争して近代的、進歩的、発展的国家にならねばならぬというケマルの言葉を引用して報告を終わった。

OH 報告は、ポストソ連期のカザフスタンおよびウズベキスタンにおけるアフスカ(メスヘティア)・トルコ人と朝鮮人のディアスポラ・ナショナリズムの比較分析である。アフスカ・トルコ人は1829年までオスマン帝国領アフスカ州に住んでいたトルコ人で、その後ロシア帝国そしてグルジア共和国に編入され、スターリン期には朝鮮人同様、中央アジアに強制移住させられた。ソ連期の朝鮮人は料理など文化的伝統を保持し続けたものの母国語を喋らなくなるまでにソ連社会に統合されたが、対照的にアフスカ・トルコ人は言語も文化的伝統も保持して朝鮮人ほど統合されなかった。ところが、ソ連崩壊後、両者は民族性の復興という観点から逆の方向に向かった。というのも、韓国政府が支援を強化したために朝鮮人の民族意識が高まり、逆にトルコ政府はそうしなかったためにアフスカ・トルコ人の民族復興はうまく進まなかったからである。

両報告とも同じ学科に所属するトルコ研究者によるものであったが、そのテーマ設定に世代間の違いが浮き彫りになったという感想をもった。両者には一国的

な枠組みからトランスナショナルなディアスポラの比較研究への進展を見て取ることができたからである。日本人参加者も主にオスマン朝研究者からの質問・コメントなどが出されて、活発な議論が交わされた。(臼杵陽)

企画セッション 2 は、やや挑発的なタイトル (Can Present Regime of Iran Survive? : An Approach to the Challenges for the Islamic Republic of Iran) のもとで、計 3 本の研究報告から構成された。まず黒田賢治会員の第一報告「現代イランの宗教と政治」では、ゴムのシーア派法学界の内部対立構造の形成と変化という観点から、2009 年 6 月の大統領選挙後の宗教界における国家体制、現政権に対して政治的立場を異にする 3 派の動向について検証がなされた。その結果、「改革／反政権派」の強固な結束力が顕在化した一方で、「保守／親国家」派による「反体制派」への接近が試みられていることから、「改革／反政権派」の結束が結果として宗教界内での「孤立」へと作用していることが指摘された。

続くアーレズー・ファフレジャハーニー会員の「イラン社会の挑戦、緑の運動と市民ネットワーク」では、「選挙結果」という政府発表に対する有権者の不信感の幅広い共有とその後展開される抗議運動の組織化も、インターネットの持つ情報の流通・共有機能と無関係ではなく、従って今後イランにおける体制変動を惹起する可能性強化の装置として、一層重要性を帯びることが指摘された。

さらに、「イランの権力構造への経済制裁のインパクト」と題する坂梨祥会員の第三報告では、制裁に関わる背景が言及された後、経済成長の鈍化、外国資本の撤退といった経済的影響に止まらず、革命防衛隊の役割の拡大・活動の広範化、それをバックボーンとした「法学者統治体制」の権力強化といった、政治的影響も併せて指摘された。いずれの報告も、セッションの問いに対する回答を見出そうとする報告者の意気込みを示す発表であった。また、広くアラブ世界での所謂「民主化運動」の展開も手伝い、多くの会員が傍聴に訪れ、熱気溢れるセッションであったことも特筆に値する。しかし、時間的制約のため、セッションの趣旨からすれば当然重要と考えられる各報告の結論のすり合わせ、それに基づく総合的議論が十分展開できずに終わった点は、反省材料とすべきものであった。

(吉村慎太郎)

### 【大会を終えて】

3 月の震災以降、あらゆる環境が一変しました。京都は、被災地から遠く離れおり、震災の直接的な影響はほとんどありませんが、それでも、震災によって多くの方が困難に直面されているという知らせを見聞きするたびに、心を痛めるとともに、普段どおりの生活を送ることがいかに貴重なものであるかを改めて認識させられました。毎年の年次大会は、前年度までの実績を参考にしながら、「例年どおり」に粛々と実施していくものではありませんが、そのような「例年どおり」という言葉の重さを、私を含めた多くの会員が、今年ほど実感したことはないだ

ろうと察します。改めまして被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げるとともに、本年度も大会が「例年どおり」に開催され、無事に終えることができたことに対して、心から感謝したいと思います。

本年度の大会は、事前申込者数が例年と比べて少なく、会の盛り上がり心配されていましたが、当日になって蓋を開けてみれば多くの参加者に恵まれ、最終的には251名に達しました。関西近辺や首都圏だけでなく、九州や北海道・東北などからも遠路はるばる京都にお越しいただきました。大会を盛り上げてくださった参加者の皆様に心より御礼申し上げます。

初日（5月21日）の公開イベントでは、岡真理会員の企画によるパレスチナ朗読劇が催されました。パレスチナ問題に関する催し物は、学会でも幾度となく企画されてきました。しかし、当事者たちの手紙やメールから構成された脚本を「読み、演じる」こと、それを私たち聴衆が「聞き、観る」ことによって成立する朗読劇という形式は、パレスチナ問題を考えるための新しい方法を私たちに提起したという意味において、きわめて斬新な試みだったと思います。学会の公開イベントの新たな可能性を切り開いたという点でも大変意義深かったのではないのでしょうか。また、朗読劇に続いて行われたシンポジウムでは、思想・文学の観点からパレスチナ問題に長年にわたって関わり続けてきたパネリストによる濃厚な議論が繰り広げられ、朗読劇も含めた思想・文学の力を改めて認識させられました。充実した時間を提供してくださった朗読劇の演者・スタッフの皆様、パネリストの皆様心から御礼申し上げたいと思います。

2日目（5月22日）の研究プログラムでは、8つの部会と韓国中東学会からの招聘者による特別セッション、公募による企画セッションが生まれ、合計57本の発表が行われました。どの発表も、研究の最前線を示す力作揃いで、日本の中東研究の水準の高さと可能性を実感しました。発表者の皆様には、入念な準備のもとで瑞々しい研究成果を発表いただいたことに対して御礼申し上げますとともに、実行委員会の事前準備に対して格別のご協力をいただいたことに心から感謝いたします。

本年度の大会も多くの方々の献身的な協力によって事前の準備、および当日の運営が行われました。実行委員会のメンバーをお願いした会員の皆様、長沢前会長、臼杵現会長、店田前学会事務局長、新井現事務局長には格別のご配慮を賜りました。また、東長靖大会事務局長とその補佐役の長岡慎介会員を中心とした実行委員会事務局の奔走なくしては、大会の成功はなかったと思います。特に、大会運営に関わる具体的な作業は、須永恵美子会員と今井静会員を先頭とする京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の大学院生によって担われました。痒いところに手が届く運営ができたとすれば、彼ら・彼女らの機転によるところが大きいものと思います。労をねぎらうとともに、学会の将来を担う若い力の台頭を心から喜びたいと思います。

最後に、来年度も年次大会が「例年どおり」開催されることを祈念して、大会

を終えての所感を閉じたいと思います。

(小杉泰)

### 【裏方から見た年次大会】

学会の大会の組織と運営はこんなにも面倒で大変なのか…。これが年次大会の実行委員会事務局のスタッフとして実際の大会の組織と運営に携わった正直な感想です。プログラムの編成・発送、研究発表要旨集の編集、大会開催資金の管理、懇親会のアレンジといった事前準備から、研究発表各セッションの管理、参加者各種対応のような大会当日の運営などなど…。これまで大会に一発表者、一聴衆として単に参加していた身からすれば、その裏にはこれほど多岐にわたる煩雑な作業があるとは想像もつきませんでした。本大会の実行委員会事務局の実働部隊は若手が中心で、規模の大きい研究大会の組織・運営の経験に乏しかったため、これらの膨大な作業に手探りで取り組んできました。そのため、今となっては「こうすればもっとよかった」と悔やまれることが多々あり、参加者の皆様にもご迷惑をおかけする場面もありました。覆水は盆に返りませんから、これらの反省点についてはしっかりと総括を行って、次年度の大会実行委員会に引き継ぎたいと思います。

「大変だった」「ああすればよかった」と、誰もが口にするようなことをあれこれと書き連ねましたが、年次大会の組織・運営に関われたことは、私を含めた若手にとって、大変貴重な経験であったことは間違いありません。昨今は、研究者に求められる資質として、研究・教育といった本来の能力に加え、「ロジ (=研究会の組織・運営)」をこなせる力が一層重視されるようになってきています。そういう風潮の中で、このような規模の大きな研究大会の組織・運営を若い時分に経験できたことは、この先長い研究者人生を歩んでいく上での貴重な財産となりました。また、これまでは、会費を納め、定期的に送られてくるニューズレターを読み、大会に足を運ぶだけのきわめて受動的な会員に過ぎなかったわけですが、裏方として年次大会を支える側に回ったことで、学会を一会員として微力ながら支えていくんだという気持ちが強まった(芽生えた)ように思います。

手前味噌ながら、私が所属する京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科は「ロジが強い」という評価をいただくことがあります。それは所属する大学院生の中で、ロジのノウハウをOJTで上級生から下級生に伝授する体制が整っているからだと思います。今回の大会でも、その強みが遺憾なく発揮され、大会の円滑な運営に貢献しただけでなく、この体制が一層強化されたように感じました。ともに年次大会事務局を支えてくれた所属の大学院生の皆さんに心から感謝したいと思います。

最後に、末筆ながら、年次大会にご参加いただいた皆様、ご協力いただいたすべての皆様に心から御礼申し上げます。

(長岡慎介)

## 【大会決算】

収入 (円)		支出 (円)	
大会開催費	300,000	通信費	63,540
大会参加費 (事前登録・140名)	140,000	要旨集印刷費	159,075
大会参加費 (当日登録・111名)	111,000	会場借用費	196,744
懇親会費 (正会員・85名)	425,000	消耗品費	80,445
懇親会費 (学生会員・35名)	140,000	懇親会費	581,750
2日目弁当代	56,000	2日目弁当代	56,000
書店寄付	15,000	公開講演会謝金・旅費	101,800
会場借用費 (学会予算より補填)	196,744	学生アルバイト代	142,500
錯誤振込	54,000	振込手数料	1,890
		錯誤振込返金	54,000
計	1,437,744	計	1,437,744
		支差引残高	0

## 託児所会計報告

収入 (円)		支出 (円)	
利用者負担 (2名)	10,000	ベビーシッター代	44,524
学会予算より補填	34,524		
計	44,524	計	44,524

## 『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告

『日本中東学会年報』(AJAMES)編集委員会より、ご報告いたします。

### 1. 27-1号、27-2号編集中

現在、27-1号、27-2号の編集作業を鋭意進めております。27-1号は今年7月、27-2号は来年1月に刊行を予定しています。

### 2. 投稿原稿締切のお知らせ

次回の投稿締切は12月1日です(昨年より20日前となっております)。論文、研究ノート、書評、中東研究博士論文要旨、特集などの投稿をお待ちしております。

またこれまでたびたび総会などの場をお借りしてお願いして参りましたが、本誌は欧文雑誌として会員のみなさまの研究成果の普及をめざしておりますので、欧文原稿ございましたら是非投稿ください。

### 3. 2011 年度『日本中東学会年報』編集委員

2011 年度『日本中東学会年報』編集委員は以下の通りです。

編集長：青山弘之

副編集長：飯塚正人、桜井啓子

編集委員：阿部るり、池田美佐子、粕谷元、近藤信彰、武石礼司、竹下政孝、  
縄田浩志、藤元優子、保坂修司、堀井健、松永泰行、山尾大、横田貴之、  
D. F. Eickelman、R. S. Humphreys、A. K. Rafeq

### 4. 本誌に関するお問い合わせ

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下の通りです。

〒183-8534 府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学総合国際学研究院 青山弘之研究室気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@tufs.ac.jp

(青山弘之)

## 第 3 回日本中東学会奨励賞の選考結果について

日本中東学会奨励賞は、「日本中東学会の若手会員の優れた研究成果の国際的な発信を奨励し、本学会の国際的な交流を促進することを目的」とし、2年に一度、1名を選び、正賞（賞状）と副賞（奨励金 20 万円）を授与するものです。若手会員とは研究刊行時に 40 歳以下であるものを指します。第 3 回は 2009-2010 年に『日本中東学会年報』や他の媒体に掲載された外国語による論文および著書が対象となり、選考は本学会評議員が各 1 点の候補作を選考委員会に推薦し、選考委員会はこれを受けて最終選考を行います。

今回の選考では、評議員 5 名から候補作の推薦がありましたが、前回と比べて、評議員からの推薦が少なく、選考委員会では、今回は全体として、奨励賞の趣旨である「国際的な発信の奨励」に値する若手会員の研究成果が出されていない状況にあると考え、残念ながら、今回は授賞作なしとすべきであると判断いたしました。

AFMA（アジア中東学会連合）や WOCMES（中東研究世界大会）、あるいはイスラーム地域研究国際会議などで若手研究者の口頭発表やポスター発表が増えています。若手研究者の方の外国語での論文・著書の公刊を期待します。評議員の方には、奨励賞の趣旨にそって、積極的に候補作の推薦をお願い申し上げます。

(三浦徹)

## 2010 年度 地域研究学会連絡協議会大会報告

去る 2010 年 11 月 27 日、2010 年度の地域研究学会連絡協議会総会が東京大学本郷キャンパスにて開催された。日本中東学会は本協議会の創設時よりその運営に深く関わってきており、2010 年度から事務局の担当こそ何とか東南アジア学会へと交代したものの、依然として幹事学会として多大な貢献を続けている。なお現在、その他の幹事学会は、アジア政経学会、オセアニア学会、日本 EU 学会、そして日本ラテンアメリカ学会である。また、当日の会場設営や総会議長（司会）も日本中東学会（大稔）が担当した。

総会における主な活動報告内容としては、2009 年 11 月のいわゆる「事業仕分け」の際の「若手研究者支援削減」に対する反対要望書の取りまとめについて、そしてニューズレター第 4 号の刊行、第 5 号の編集作業、会費徴収、担当者変更連絡などが挙げられた。そして、日本学術会議・地域研究委員会の油井大一郎氏から『『日本の展望-地域研究からの提言-』の意義とこれから』について、資料にもとづく詳細な説明が行われた。

また、主な審議内容は、日本マレーシア学会の加盟承認、国立情報学研究所の学協会情報発信サービス廃止に伴う措置について、地域研究の今後の在り方をめぐって、学会の法人化、地域研究コンソーシアムとの連携についてなどであった。より詳細な情報はニューズレター第 5 号（後述）をご覧ください。

日本中東学会からは、協議会のニューズレター 4 号にも、様々な記事を会員が寄稿している。特に、御多忙のところ無理を押して寄稿された店田廣文事務局長（当時）と臼杵陽理事（当時）には、この場を借りて心より感謝の気持ちを記させていただく。なお、このニューズレターはオンライン化されていて、紙媒体は存在せず、協議会のホームページ（<http://www.jcas.jp/asjcasa/jcasa-newsletter.html>）からダウンロードできますので、ご覧下さい。（大稔哲也）

### 電子版ニューズレターへの移行について

日本中東学会も設立から四半世紀を過ぎました。今号の「会長挨拶」にもあるように、壮年期に入ったと言えます。最近のニューズレターをご覧くださいとわかるとおり、年次大会で発表する会員が増え、公開講演会や海外での学会参加を含め、学会員は数多くの研究プロジェクトや文化的企画に関わるようになってきており、それらの報告にかなりのページを必要とするようになりました。

また、昨今の諸事情を考えると、インターネット上の情報を探したり利用したりする会員は多数派になっているものと想像されます。学会は今後ますます、会員同士が情報を交換したり、リアルタイムで中東に関心を持つ人々に知識や情報

を提供したり、さまざまレベルで意見交換や議論を行ったりする《情報プラットフォーム》としての役割を果たさなくてはいけなくなることでしょう。ニューズレターでもたらされる興味深い報告や記事も、会員が各々のパソコンでリンクをはって利用しやすい形にする必要があるのではないかと考えるに至りました。予算の関係から現在ニューズレターはモノクロで印刷されていますが、その枷がなくなれば、カラー写真などビジュアルなコンテンツを充実させることができるようになります。さらに、印刷物を減らしてゆくことは、エコロジカルな観点からも望ましいと考えます。

このような理由から、日本中東学会では学会ウェブサイト（ホームページ）を充実させるとともに、ニューズレターの電子化を行いたいと考えております。先日の年次大会で承認された通り、本年度は電子版ニューズレターへの移行を検討することとし、可能であれば部分的にでも移行を開始したいと考えております。

昨今の状況を見ますと、学会出版物の電子化は時代の流れとも言えます。しかしながら、電子化が会員のなかに情報格差（デジタル・デバイド）をもたらし、一部の会員が学会活動の情報を得ることができないようなことがあってはなりません。このような点を考慮し、ニューズレターの電子化につきまして、現時点での会員の皆様のご意見をうかがいたいと存じます。

電子化の具体的な方法としては、現在と同じ形式のニューズレターを PDF ファイルで作成してウェブサイトに掲載し、その URL をメール等で会員の皆様にお知らせする（ニューズレターには個人情報も掲載されているため、会員版と一般公開版は区別する）、という方法を検討していますが、いかがでしょうか。メールで受け取るのは具合が悪い、ニューズレターは紙に印刷されていないと読みにくい、などのお考えや事情を抱えている方々はいらっしゃいますか。

どうか、同封のハガキで、電子版ニューズレターへの移行について、忌憚のないご意見をおきかせいただきたく存じます。お返事は、次のニューズレターの準備を始める 9 月 1 日までにいただければ幸いに存じます。

ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

（事務局・山岸智子）

## 会員の異動

### 【新入会員】

Victor Manuel  
Barraso

大橋 一寛

河村 朗

近藤 洋平

佐藤 麻里絵

真道 洋子

沼田 彩誉子

番匠 未来

常陸 民生

**【2010年度末をもっての退会者】**

H.B. Paksoy 仲橋源太 原田裕子 前田君江

(事務局)

**寄贈図書**

**【単行本】**

吉村慎太郎 『イラン現代史—従属と抵抗の100年』有志社、2011年

塩田勝彦 『ヨルバ語入門』大阪大学出版会、2011年

依田純和 『アラビア語パレスチナ方言入門』大阪大学出版会、2011年

## 【逐次刊行物】

- 『民族紛争の背景に関する地政学的研究』 Vol. 16, Tales of Palestinian Liars – Palestinian folk Literature Collected and Edited with an Analytical Introduction, 大阪大学世界言語研究センター、2010年
- 『民族紛争の背景に関する地政学的研究』 Vol. 17, On Borders: Comparative Analyses from Southeastern Europe and East Asia, Selected papers from the Belgrade Conference (Sep. 9-10, 2010, Serbia) and the Zagreb Conference (Sep. 13-14, 2010, Croatia), 大阪大学世界言語研究センター、2010年
- 『民族紛争の背景に関する地政学的研究』 Vol.18: 平成 22 年度報告書、大阪大学世界言語研究センター、2011年
- 『トルコ共和国とラーイクリキ』 SOIAS Research Paper Series 4、上智大学イスラーム地域研究機構、2011年
- 『文献目録トルコの世俗主義（ラーイクリキ）』 SOIAS Research Paper Series 5、上智大学イスラーム地域研究機構、2011年
- 『東南アジア・イスラームの展開—地の革新と伝達の諸相—』 SOIAS Research Paper Series 9、上智大学イスラーム地域研究機構、2011年
- 『アラブ・イスラム研究』 第9号、関西アラブ研究会、2011年
- 『アジア太平洋フォーラム・淡路会議 2010』 アジア太平洋フォーラム・淡路会議事務局、2011年
- 『岡山市オリエント美術館研究紀要』 25号、岡山市オリエント美術館、2011年  
*Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. 74, no.1, Cambridge University Press, 2011.
- Perceptions: Journal of International Affairs*, vol. XIV Number 3-4, The Center for Strategic Research (SAM), 2009.
- AIIC (The Asian Institute for Intellectual Collaboration) News Vol. 3, 立教大学 AIIC, 2011.

## 事務局より

2011年度から事務局が慶應義塾大学に移転しました。評議員に選ばれたこともない会員がいきなり事務局長（特任理事）として学会運営に加わるという一種の異常事態ではありますが、2年間よろしくお願ひします。日本中東学会は会員数700名程度の、中規模の学会と言えます。この学会の面白いところは任意団体であるという点です。つまり、来月学会を散会してもいいですし、2～3世紀、場合によってはそれ以上存続する可能性もあるわけです。24世紀の日本中東学会はどのような組織になっているのでしょうか。設立の理念である「地域研究としての中東研究の推進」はなされているのでしょうか。日本や世界における地域研究、中

東研究は学問領域としてどのような位置にあるでしょうか。今から3世紀後にどのような形で会が存続しているのであれば、確実に言えることがひとつあります。それは、会が長続きするのは組織の体裁が整っているからではなく、設立者や特定の会員が尽力したからでもなく、各会員が各時代において中東研究を推進していきこうと心をひとつにしたからに他ならないということです。

まずは、2013年3月の任期末まで日本中東学会を存続させなければなりません。それには会員みなさまの御協力が欠かせません。2年間を150回繰り返せば3世紀になります。なにとぞよろしくお願い申し上げます。 (新井和広)

## 編集後記

チュニジアに始まった民主化要求の波は、その波及先で、岩礁にぶつかり、湾に入り込み、防波堤に押し戻され、あちらこちらで波紋というには複雑すぎる影響を見せています。中東・イスラーム世界の複雑さを再度認識させられ、研究者の出番はこれからだとの思いを強くいたします。

総会でもお認めいただいたように、今年はニューズレターの電子化にむけて、一步を踏み出す年にできたらと思っています。まずは、同封の葉書やメールでご意見をうけ賜わりたく存じます。どうかご協力のほどよろしくお願い申し上げます。 (山岸智子)



## 会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2012年度会費の郵便振替用紙、あるいは、それ以前の会費に未納がある方には、該当する年度も明記した郵便振替用紙、が同封されておりますのでご利用ください。AJAMESに未送付分がある場合は、2011年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。会費納入率は低い状態が続いており、学会事務局の運営にも支障を来しかねない状況です。是非とも会費納入を宜しくお願い申し上げます。請求会費額は2011年6月末の入金確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

### 日本中東学会ニューズレター 第125号

発行日 2011年7月14日  
発行所 日本中東学会事務局  
印刷所 東洋出版印刷株式会社

### 日本中東学会事務局

〒223-8521  
神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1  
慶應義塾大学商学部  
新井和広研究室内  
日本中東学会事務局  
電話/ファクス：045-566-1247  
Eメール: james@db3.so-net.ne.jp  
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>  
郵便振替口座：00140-0-161096（日本中東学会）  
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店（普）5346808  
（日本中東学会 代表 臼杵 陽）